
JIU 教職課程年報

第 4 号 2020 年度



城西国際大学
JOSAI INTERNATIONAL UNIVERSITY

目次

巻頭言	3
●教職課程担当教員による報告	
○調査報告	
『学習を通して日本語文法のイメージはどのように変容するかー比喻生成課題による検討ー』	
野々口ちとせ 国際人文学部・准教授	5
○実践報告	
『COVID-19流行期における養護実習の感染対策に関する体験と学び』	
岩田浩子 看護学部・教授	
太田幸雄 看護学部・助教	
石井恵美子 看護学部・助手	15
●学生実習報告	27
○教育実習(中学校・高等学校)	
英語科 筒木友梨(中学校)、川平穂乃花(中学校)	
社会科 川原田創司(高等学校)	
保健体育科 宮城律希(高等学校)、大須賀智哉(中学校)、奥山嘉月(中学校)	
○教育実習(幼稚園)	
石井美怜、土田樹里亜、青木颯真	
○養護実習	
川嶋桃花(高等学校)、内山一穂(小学校)	
●教員紹介	49
目時修 経営情報学部・准教授	
太田幸雄 看護学部・助教	
●2020 年度 教職課程スケジュール	51
●「教職課程担当教員による報告」投稿要領	53

巻頭言

2020年度JIU教職課程年報の発刊は第4号となります。教職課程の教育について関係する学校、教育委員会等の皆様にはご理解とご協力を賜り、感謝しております。

2020年度はCOVID-19流行の1年でした。昨年の3月は全国の小学校・中学校・高等学校及び特別支援学校の一斉休業が通知され、学校教育の現場はオンライン学習、課題学習の実施のために多くの時間を費やしたのではないのでしょうか？また、分散登校を経て通常授業になっても、「新しい学校生活様式」の中で感染予防に苦慮しながら児童生徒の学習活動を展開してこられたと推察いたします。

教職課程においては、教育実習の実施に感染状況の影響がありました。教師にとって児童生徒と直接かわり、児童生徒の理解を基盤とした教育が土台である中で、その資質能力を形成する場である教育実習を従来のように行うことができない可能性が大きくなりました。幸いにして本学の教育実習は実習校のご理解とご協力を得て、時期及び期間の変更等により実施することが出来ました。本当に感謝しております。

教職課程を担当する教職員は、様々な課題や困難の中で教師を目指す学生を支援し、児童生徒の一人一人に寄り添い教師として成長できる能力の基盤を形成していくことを目指しております。

この教職年報は教職課程を担当する教員の教育実践の課題を探究した足跡を発表しています。教育実習でご協力をいただいた実習校の皆様、実習の調整をしていただいた教育委員会の先生方をはじめ多くの関係諸機関の皆様にご一読いただければ幸いです。

2021年度は緊急事態宣言が解除され、感染防止対策をとりながら「新しい学校生活様式」として笑顔が多くみられる学校生活に戻ることが出来ることを願っております。

JIU 教職年報 第4号編集長
養護教諭課程 岩田 浩子

**城西国際大学**
JOSAI INTERNATIONAL UNIVERSITY

教職課程

[▶ 城西国際大学ホームページ](#)

教職課程の理念・目的	取得可能免許種および教科について	教職免許状取得のために	スケジュール	教員紹介	Q & A
------------	------------------	-------------	--------	------	-------

ひとと
生徒を育てる、
ひとと
先生になりたい。

教職課程とは教育職員免許状を取得するために必要な履修課程です



城西国際大学 教職課程 Web サイト

https://www.jiu.ac.jp/teacher_training/



学習を通して日本語文法のイメージはどのように変容するか — 比喻生成課題による検討 —

野々口ちとせ 国際人文学部・准教授

1. 問題の所在

日常生活で母語の文法が母語話者に意識されることはほとんどないだろう。しかし、文法学習となると、生徒に苦手意識が生じる傾向が高校での調査で示されている。森田（2014）は、ベネッセ・スタディーサポートによる埼玉県立 A 高等学校の第 1 学年を対象とした入学直後である 4 月の調査結果で、国語における苦手事項として最も多く挙げられた回答が古典文法（25.8%）であったことを報告している。そして、森田（2014：53）は「まだ文語文法を学習していない時点において、既に苦手意識を持っていることは看過することのできない問題」であり「文語文法を苦手とするのは、もともと文法学習が苦手だったからではないか」と問題提起している。その理由として「これまでの中学校での文法学習が、ともすれば、ただ『覚えるべきもの』としての学習、つまり、知識注入型の学習になっていたという点」（森山 2002：13）が挙げられている。

では、大学の専門科目としての日本語文法はどうだろうか。中学校以来の知識注入型の学習イメージは、大学入試を終えてからの専門科目としての（あるいは国語科・日本語教員養成課程における）日本語文法の学習によって変容するのだろうか。

本調査では、本学国際人文学部の専門科目である「日本語の文法 a」の履修者が、文法学習を通して日本語文法に対するイメージをどのように変容させるかを明らかにし、日本語文法教育への示唆を得ることを目指す。

2. 先行研究

文法は内省により意識の対象になりうる。そして、文法意識はメタ言語能力の一つと考えられている（山室 2005）。中沢（1980）は文法意識について次のように述べている。

文法事実の内にあって、それを支えている法則性、つまり文法を、全体的感覚的に身につけたのが文法感覚である。その感覚として身につけている法則性を、はっきりと意識にのぼせると、それが文法意識になる。それは文法事実内に内在する法則性-文法を意識し、自覚することにほかならない。（中沢 1980：29）

つまり、文法を正しく使える母語話者には文法感覚があると言えるが、すべての母語話者に文法意識があるとは限らない。文法の法則性が「はっきりと意識にのぼせる」か否かが、感覚と意識の違いである。国語科教育での文法学習はメタ言語能力の一つである文法意識を身につけることを目指しており、大学の専門科目としての日本語文法学習においても同様の目標設定が考えられる。

大学生を対象とした文法意識調査には加藤（2009）と百留（2011）によるアンケート調査がある。

①文法がすきか、きらいか、という問いに対して、327名の大学生を対象とした加藤（2009）の調査では「すき」が21.4%で、「きらい」と「どちらでもないがあえて言うならきらい」を合わせると52.9%であった。同じ調査（加藤2009）で「文法について学んだことは、あなたにとって役に立っていますか」と質問したところ、口語文法で32.4%、文語文法で31.1%、英文法で41.8%の学生が「役に立っている」と回答しており、「『すき』だとは思わないが『役には立っている』と考える学生の存在が推測される」としている。日本語文法の受講者30名を対象とした百留（2011）の調査結果によると、「きらい」の回答が15名、「どちらでもないがあえて言うならきらい」との回答が10名であった。この調査では、1名のみが「すき」、4名が「どちらでもないがあえて言うならすき」と答え、その理由として、先生の教え方、および古文や外国語といった言語学習に役立つという理由を挙げたと報告している。この結果を受けて百留（2011：58）は「ことばそのものへの関心は育っていないのか、それと文法が好きになることとは関係ないと捉えているのかどちらかであろう」と考察している。

他方、本学は国際大学であり、留学生の履修者も多い。留学生の日本語学習に使用される初級日本語教科書を対象とした文法教育観に関する中川（2004）の論考において、「初級学習者に対する教育内容の中で会話と文法の指導がもっとも重要な役割を果たす」（p.4）と指摘されている。多くの日本語学習者は、学習のはじめである初級段階において「文型」に代表される文法学習を積み重ねて学習を進めている。このことから、留学生は日本語母語話者よりも日本語文法の意識が高い可能性がある。だが、中川（2004：12）は「文法を意識させないように会話を表向きにした内容展開となっているのが一般的」として以下のように述べている。

多くの教育機関で用いられている教科書や日本語教育における教授法は、直接的教授法や自然主義教授法を文法教育の方法論として採用していることがわかる。つまり、文法規則の内在化、言い換えれば無意識の言語運用を可能ならしめる方向に学習者を導くことを意図している。（中川2004：12-13）

したがって、日本語上級者である留学生の中には、日本語母語話者と同様、日本語の文法に対して無意識になっている者もいる可能性がある。

また、教え手としての文法に対する意識と学び手としての意識は必ずしも一致しないことが明らかになっている。中国語母語話者教師と日本語母語話者教師へのアンケート調査を行った小野（2006）は日本語教師の文法観を、〔A〕教授者としても、学習者としても文法が大切だと強く考える、〔B〕教授者としても、学習者としても文法が大切だとやや考える、〔C〕教授者としての方が、学習者としてよりも文法が大切だと考える、〔D〕教授者としても、学習者としても文法が大切だとは考えない、という4種類に分類した（下線は筆者による）。小野（2006）の結果は日本語教師を対象としたものだが、教授者としての文法観と、学習者としての文法観に異なる考えがありうることを示している。

以上、先行研究の概観から、学生の日本語文法に対するイメージは中学校・高等学校での国語学習の影響を受けてあまり好ましいものではないと想定されること、留学生の日本語文法に

対する意識は上級者になるほど日本語母語話者に近くなる可能性があること、教員志望の学生は教師として「文法が重要」と考える可能性があることがわかった。

本学の「日本語の文法 a」は国語科・日本語教員養成のための日本語文法学習の科目として設置されており、国語科教員あるいは日本語教員を目指す学生たちの、学習者としての文法観だけではなく、教授者としての文法観の形成にも注目する必要がある。

3. 本調査の目的と課題

本調査は、本学国際人文学部の専門科目として設置されている日本語文法科目「日本語の文法 a」における教育実践上の改善点を探ることを目的として実施し、以下 2 つの研究課題を設定する。

研究課題 1：日本語文法科目の履修者は、履修前に日本語文法に対して、どのようなイメージを持っているか。

研究課題 2：日本語文法科目の履修者は、履修を通して日本語文法に対するイメージをどのように変容させるか。

本調査では、比喩生成課題を用いて、日本語文法に対するイメージの変容を明らかにする。

4. 調査の方法

4.1 調査対象

本調査は 2020 年春学期に、本学国際人文学部の専門科目「日本語の文法 a」¹の履修者を対象として実施した。「日本語の文法 a」という科目は、中学校・高等学校教諭課程（国語科）及び日本語教員養成課程（副専攻）の選択科目である。しかし、この科目の履修者全員が中学校・高等学校教諭課程（国語科）または日本語教員養成課程の学生というわけではなく、むしろこれらの課程に属する学生は少数で、大多数は国際人文学部の専門科目群の一部として履修している学生である。

回答者数は初回講義後が 86 名（日本人³ 63 名、留学生 23 名）、最終講義後²が 84 名（日本人 56 名、留学生 28 名）であった。学期途中で履修をやめた者や途中から履修を始めた学生がいるため、第 1 回と最終回の回答者は全員一致するわけではない。

4.2 調査方法

2020 年度の「日本語の文法 a」の初回講義後と最終講義後に、比喩生成課題の手法を用いて、日本語文法のイメージ調査を実施した。本調査で単に文法がすきかきらいかをたずねるのではなく、比喩生成課題を実施した理由は、比喩生成課題を通して高度に抽象的あるいは複雑な個人の認識や価値観を理解する（清水 2007）ためである。比喩生成課題を用いた研究には、大学生と新任教員、現職教員を比較した教師の熟達化の研究（秋田 1996）や、教育実習生の成長の縦断的研究（深見・木原 2004）、日本語教師を対象とした自己イメージの研究（岡崎 1998）などがある。

4.3 調査内容

本調査では、比喩生成課題を「私にとって、日本語の文法とは【 】である。なぜなら【 】」の空欄を埋めるタスクとし、記入欄を 1 つ設けた。

4.4 分析方法

回答の「なぜなら【 】」の理由部分の内容が類似しているものを集めてグループ化し、理由に共通する意味を抽出してそのグループのイメージとした。回答数は日本人学生と留学生に分けて集計した。

4.5 倫理的配慮

全履修者に調査の目的を説明し、回答内容は成績に関与しないこと、回答結果の発表時に個人が特定できないようにデータを扱うことを口頭で説明した。

5. 「日本語の文法 a」の概要

「日本語の文法 a」のシラバスを表 1 に示す。シラバスに掲げた学習項目の前に、毎回の授業で「日本語ドリル」と称して、短い文章に適切な接続詞を挿入する練習や日常生活に見られる日本語の誤用を見つけて訂正する練習なども実施した。

表 1 2020 年度春学期「日本語の文法 a」シラバス（第 6, 10, 14 回は課題による学習）

1	5/13	授業の概要と導入：文法とはどういうものか
2	5/20	名詞
3	5/27	こ・そ・あ・ど（指示詞）
4	6/3	文の組み立て
5	6/10	動詞（現代語・古典語）
6		形容詞・形容動詞（現代語・古典語）
7	6/17	格助詞
8	6/24	その他の助詞・接続詞
9	7/1	連用修飾・連体修飾
10		態（受動態・使役態）
11	7/8	話し手の捉え方・聞き手への働きかけを表す表現：モダリティ
12	7/15	時の表現：テンスとアスペクト
13	7/22	補助動詞
14		待遇表現
15	7/29	復習・まとめ

6. 結果と考察

6.1 研究課題 1 の結果と考察

初回講義後の調査結果を表 2 に示す。

表 2 第 1 回の日本語文法のイメージ（比喻の例の後ろの数字は人数）

イメージ	計	日本人	留学生	比喻の例
知らないことがたくさんある	14 (16%)	6 (10%)	8 (35%)	海(2)・山(2)・迷路(2)・髪の毛・宇宙・古い時計・ブラックホール・ガム・歴史年表・悪夢・玉ねぎ
簡単なようで難しい・奥深い	12 (14%)	12 (19%)	0 (0%)	親(2)・スマホ(2)・お金・こま・梅干し・タケノコ・親戚・西洋美術・カレー・海
必要不可欠・重要	9 (10%)	8 (13%)	1 (4%)	体の一部・釘・一生涯のパートナー・宝石箱・食べ物・日用品・水・空気・洋服
いろいろ形が変わる・種類が多い	9 (10%)	6 (10%)	3 (13%)	細胞・波・飲み物・水(2)・万華鏡・パズル・キャンディ・石ころ
難しいが役に立つ	8 (9%)	5 (8%)	3 (13%)	辛いスープ・パズル・モスバーガー・野菜・ダイヤ・コーヒー・青汁・くすり
勉強するほど味わえる	7 (8%)	2 (3%)	5 (22%)	面白い事・グミ・玉ねぎ・映画・うさぎ・ケーキ・お米
組み合わせ	7 (8%)	7 (11%)	0 (0%)	引き出し・パズル(2)・カメレオン・衣服・調味料
規則	4 (5%)	4 (6%)	0 (0%)	メイク道具・数学(2)・法律
つかめそうでつかめない	4 (5%)	4 (6%)	0 (0%)	迷路・水物・鳥・こま
語をつなぐ	3 (3%)	1 (2%)	2 (9%)	線・橋・日本語を学ぶための基礎
外国語を習うこと	2 (2%)	1 (2%)	1 (4%)	第 2 外国語をもっと習うこと・浮気相手
似ているが違う	2 (2%)	2 (3%)	0 (0%)	双子・鏡
教師になるための科目	1 (1%)	1 (2%)	0 (0%)	とても大切な授業
苦手な科目	1 (1%)	1 (2%)	0 (0%)	苦手な文法を 1 から学び直すための科目
話者の心を映す	1 (1%)	1 (2%)	0 (0%)	鏡
正しく使えるとカッコいい	1 (1%)	1 (2%)	0 (0%)	パソコン
好きな時もあれば嫌いな時もある	1 (1%)	1 (2%)	0 (0%)	雨
合計	86 (100%)	63 (100%)	23 (100%)	

日本人学生の回答で最も多かったのは、「親」や「スマホ」といった比喩による「簡単なようで難しい」イメージで、日本人学生全体の19%を占めている。日本語母語話者にとっては身近なようで知らないこともあるというイメージで、これは「つかめそうでつかめない」イメージ(6%)と共通していると言えよう。「簡単なようで難しい」と「つかめそうでつかめない」を合わせると、日本人学生の4分の1がこのイメージを持っていることになる。他方、留学生の回答で最も多かったのは「知らないことがたくさんある」というイメージで留学生全体の約35%であった。こちらは終わりが見えないものとして、「海」や「山」といった比喩で表された。日本人学生は中学校の国語科学習で、留学生は外国語としての日本語学習で、両者とも文法学習をしてきたはずだが、どちらにしても「まだ知らないことがある」というイメージを持つ者が多いことがわかった。注目すべきは「親」や「スマホ」といった比喩に代表されるように、「難しい・奥深い」というイメージが必ずしも「きらい」を意味するわけではないことである。文法そのものへのイメージは、加藤(2009)や百留(2011)が明らかにした文法学習に対する意識とは異なる可能性がある。これは本調査の対象科目が、一般教養としての必修科目ではなく専門科目としての選択科目であることが影響しているのかもしれない。文法が苦手だからこそ学び直すと回答した学生が1名いたが、文法に対してより強く苦手意識を持っている学生は「日本語の文法a」を履修していない可能性がある。

次に多いのが「体の一部」「日用品」といった比喩による「必要不可欠・重要」という機能上のイメージと、「水」「万華鏡」といった比喩による「いろいろ形が変わる・種類が多い」という形態論的イメージであった。前者は日本人学生が多く全体の1割強、後者は日本人学生・留学生ともに全体の1割強を占める。形態論的イメージは、品詞分解や活用の種類の暗記といった活動からもたらされたものと推測される。日本人学生では、「組み合わせ」「規則」といった統語論的なイメージも全体の1割強を占めており、「パズル」や「数学と」といった比喩が見られたが、留学生にこのイメージを挙げる者はいなかった。「必要不可欠・重要」(9名、10%)「難しいが役に立つ」(8名、9%)といった機能上のイメージを挙げる者も少なくなく、前者は「空気」や「水」、後者は「くすり」や「青汁」といった比喩で表現された。

少数派には、「語をつなぐ」という統語論的イメージや、「話者の心を映す」という認識論的イメージがあった。また、「苦手な科目」として学び直しに位置付けるイメージや「教師になるための科目」として「とても大切な授業」というイメージも挙げられた。百留(2011)の調査と比べると、「きらい」と明示したイメージはないが、「簡単なようで難しい」「つかめそうでつかめない」「難しいが役に立つ」といったイメージに転化しているのかもしれない。

6.2 研究課題2の結果と考察

最終回の授業での調査結果を表2に示す。

日本人学生の回答では、初回講義後と同じ「簡単なようで難しい・奥深い」というイメージと、パズル・光・波・カメレオンといった比喩による「いろいろな形に変わる」という形態論的イメージが同数(各10名、日本人学生全体の約18%)で最も多かった。

「簡単なようで難しい・奥深い」というイメージは、初回講義後と比較すると若干減少しているが、日本人学生を中心にこのイメージが最も多く挙げられたことは履修前後で変わらなかった。日本語母語話者や日本に暮らす留学生にとって日本語文法は身近な存在であるが、意識すると深

い意味があつたり難しいと感じられたりしていると解釈できよう。学生の一定数には日本語文法に対する意識化があり、それは履修前後であまり変化がなかったと考えられる。

表 3 最終回の日本語文法のイメージ（比喩の例の後ろの数字は人数）

イメージ	計	日本人	留学生	比喩の例
簡単なようで難しい・奥深い	14 (17%)	10 (18%)	4 (14%)	髪の毛・計算・スポーツ・スマホ・水物・お酒・海・玉ねぎ・旅・家族・雲・日常に潜む大型モンスター・片思いの相手・カレーライス
いろいろな形に変わる	12 (14%)	10 (18%)	2 (7%)	魔法・トリックアート・波・光・カメレオン・缶入りドロップ・恋人・料理・調味料・パズル(2)・服
覚えるのが難しい	12 (14%)	7 (13%)	5 (18%)	富士山・サッカーのルール・台風・宇宙・ゴーヤ・クルミ・数学公式・とても難しい文法・レモン・フランスパン・パズル(2)
組み合わせ	8 (10%)	8 (14%)	0 (0%)	数学(2)・計算・パズル(3)・レゴ・料理
勉強するほどわかるようになる	8 (10%)	4 (7%)	4 (14%)	子ども・野菜の切り方・薬・パソコン・化粧品・プロテイン・山・スーツ
多すぎて学びきれない	7 (8%)	2 (4%)	5 (18%)	海(2)・山(2)・星・地球・河川
難しいが面白い	7 (8%)	4 (7%)	3 (11%)	映画鑑賞・辛い料理・宝箱・分厚い本・性格が真反対の友達・パズル
無意識	6 (7%)	5 (9%)	1 (4%)	常識・空気・初恋の人・綿毛・スマホ・日用品
重要	3 (4%)	3 (5%)	0 (0%)	水・日本人にとっても重要・大事
語をつなぐ	2 (2%)	0 (0%)	2 (7%)	橋・骨
ゴールがある	2 (2%)	2 (4%)	0 (0%)	迷路・パズル
遠慮するかのように結果を最後に述べる	1 (1%)	1 (2%)	0 (0%)	日本人の性格そのもの
美味しかったが飽きっぽくなる	1 (1%)	0 (0%)	1 (4%)	ケーキ
第二外国語のアイデンティティの確立	1 (1%)	0 (0%)	1 (4%)	他のアイデンティティの確立
合計	84 (100%)	56 (100%)	28 (100%)	

「いろいろな形に変わる」については、「日本語の文法 a」で形態論的な内容を特に多く取り上げているわけではないが、日本人学生がこのイメージを多く挙げていることから、品詞や活用に注意を向けることの多い中学校・高等学校での文法学習が連想された影響があったのかもしれない。

留学生で最も多かったイメージは、「海」「山」といった比喩による「多すぎて学びきれない」と「覚えるのが難しい」で、両者を合わせると計 10 名と留学生全体の約 36% を占める。留学生にとっては日本語文法が外国語として暗記の対象となっているのか、大学の専門科目としての文法学習においても知識注入型の学習になってしまった事例と考えられる。これは日本人学生にも少なからず見られる現象で、「覚えるのが難しい」は 7 名、「多すぎて学びきれない」が 2 名で

計 9 名、日本人学生全体の約 16%を占めている。大学での学修においても、試験勉強からの脱却と文法学習への苦手意識の克服ができていないことがうかがえる。本調査の結果から、「日本語の文法 a」の履修者は、履修前は文法及びその学習に対してそれほど強い嫌悪感を持つわけではない集団であったが、この科目の学習を通して、計 19 名（全体の 23%弱）の履修者に履修後「覚えるのが難しい」と「多すぎて学びきれない」というイメージが形成されてしまったと考えられる。最終講義後の調査が期末試験の直前であったことが影響している可能性もあるが、全体の 2 割ほどの学生にとっては、文法学習がバラバラとした知識の羅列や、試験のための知識注入型学習になってしまっていると言えよう。

反面、「勉強するほどわかるようになる」と「難しいが面白い」は、初回講義後の調査では現れなかったイメージで、この二つを合わせると計 15 名で全体の約 18%を占める。これらのイメージからは文法学習に対する一定程度の達成感が表れており、全体の 2 割弱の学生には文法学習に対する積極的・好意的な態度が醸成されている。つまり、履修後には、文法学習に対する態度の二極化が進んでいると考えられる。他方、「無意識」という回答も 6 名（全体の 7%）あり、これを無意識の意識化とみることもできるが、むしろ文法の意識化があまり進んでいない証左と解釈すべきかもしれない。

初回講義後と同様のものとしては、「組み合わせ」という統語論的なイメージが 10%ほど現れている。また、「語をつなぐ」という統語論的イメージも少数だが、留学生に見られた。

逆に、初回講義後に見られた「知らないことがたくさんある」というイメージはなくなっており、文法に対する漠然としたイメージは払拭されているようである。「重要」というイメージは初回講義後の調査では全体の 1 割以上を占めていたものの、最終講義後には 5%以下となっており、他のイメージに変化したことがわかる。

履修者別にイメージの変化を追跡してみると、学生 A の場合、初回講義後の調査では「洋服」という比喻を挙げ、その理由を「毎日欠かせないからである」としていたが、履修後の調査で A は「パズル」に例え、その理由を「ピースのようにつなぎあわせることができるからである」と述べている。学生 B は 1 回目の調査で「体の一部」という比喻を挙げ、その理由を「小さいころから毎日使っているからである」としていたが、履修後は「数学」に例え、「ルールに沿ってあてはめると正しい答えが導き出せるからである」との理由を述べている。学生 A や B の変化からは、日常や自分の一部として漠然と捉えられていた文法が、「ピースのつなぎあわせ」や「ルール」としてはっきり認識されていることがうかがえ、文法の意識化が進んでいると考えられる。学生 A や B の変化はメタ言語能力につながるイメージへの変容と見ることができるだろう。教員志望と明記した学生が 1 名おり、この学生の「重要」という文法イメージは履修前後で変化することがなかった。

7. 結語

本調査では、日本語文法科目の教育実践上の改善点を探ることを目的として、履修者の日本語文法に対するイメージの変容を明らかにした。

結果、日本人学生を中心に「簡単なようで難しい・奥深い」というイメージが最も多く挙げられたことは履修前後で変化がなく、履修者の一定数（本調査では全体の 2 割弱）には文法が意識化されていることが確認された。また、日本語文法科目は、留学生と日本人学生の一部（全体の 2 割弱）には知識の羅列・断片化・暗記科目となってしまうことが推測された。一方、

全体の2割弱の学生には文法学習に対する積極的・好意的な態度が醸成されており、文法学習を通して態度の二極化が進んだとも考えられる。履修者別に変容を追うと、一部の学生で、日常や自分の一部として漠然と捉えられていた文法が意識化されており、メタ言語能力につながるイメージへの変容が見られた。教員志望の学生は「文法は重要」という確固としたイメージを持っており、履修前後での変化はなかった。

日本語文法学習が試験のための知識注入型から脱却するには、今後、文法知識が羅列や断片にならないようネットワーク化を促したり、言語に対する意識を刺激したりする学習活動や評価が必要であろう。具体的には、授業や試験などに、コーパスの利用による言語調査や生活での言語使用をふり返る活動など、文法知識を「使う」ことで文法意識を刺激する活動を多く取り入れる工夫が求められる。

注

- 1 本学国際人文学部には日本語文法に関する科目が二つあり、「日本語の文法 a」は主に学校文法を、「日本語の文法 b」は外国語としての日本語教育での文法を中心に扱う科目として区分されている。
- 2 2020 年度春学期は新型コロナウイルスの影響で学期開始が遅れたため、全 12 週で授業が実施された。そのため最終回は第 1 回の 12 週後となったが、学修内容は全 15 週の内容と同様である。
- 3 大多数が日本語母語話者であるが、親が外国籍の学生も含まれている。

参考文献

- 秋田喜代美 (1996) 「教える経験に伴う授業イメージの変容：比喻生成課題による検討」『教育心理学研究』44(2), 176-186.
- 岡崎眸 (1998) 「日本語教師の自己イメージ」『お茶の水女子大学人文科学紀要』51, 289-300.
- 小野正樹 (2006) 「日本語教師の文法観：中国語母語話者教師と日本語母語話者教師へのアンケート調査から」『筑波大学留学生センター日本語教育論集』21, 53-61.
- 加藤久夫 (2009) 「橋本文法」の今日的意義：「文法」についての意識調査から」『日本語学』28(4), 36-48. 明治書院.
- 清水寿子 (2007) 「実習生の共生日本語教育イメージの変容：比喻生成課題による検討」『言語文化と日本語教育』33, 153-156.
- 中川かず子 (2004) 「日本語学習書に見る文法教育観：比較文化的、歴史的概観」北海学園大学人文論集 26・27, 1-16.
- 中沢政雄 (1980) 『中学校新文法指導法の開発』東京書籍
- 百留康晴 (2011) 「国語の授業と日本語文法」『島根大学教育学部紀要』44, 55-63.
- 深見俊崇・木原俊行 (2004) 「他者との関わりによる教育実習生の実践イメージの変容」『日本教育工学会論文誌』28(1), 69-78.
- 森田恭章 (2014) 「文法学習の意義の意識化を目指した指導の考察：『羅生門』における受身の助動詞に注目して」『上越教育大学国語研究』28, 43-53.
- 森山卓郎 (2002) 『表現を味わうための日本語文法』岩波書店
- 山室和也 (2005) 「国語教育における「文法教育」観の転換：メタ言語能力の一つとしての文法意識の発達と確立」『全国大学国語教育学会国語科教育研究：大会研究発表要旨集』31-34.

COVID-19 流行期における養護実習の感染対策に関する体験と学び

岩田浩子 看護学部・教授

太田幸雄 看護学部・助教

石井恵美子 看護学部・助教

研究の背景

2020 年 1 月からの新型コロナウイルス感染症（以下 COVID-19 とする）の感染拡大に伴い、人々は「新しい生活様式」の中で行動の自粛、感染対策自己管理を余儀なくされている。学校現場では 2 月 25 日に新型コロナ感染症対策本部が決定した「新型コロナウイルス感染症対策の基本方針」を受けて、2 月 28 日付け「新型コロナウイルス感染症対策のための小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校等における一斉臨時休業について」¹⁾ の通知が出され、3 月 2 日から春季休業の開始日までの間、学校保健安全法第 20 条に基づく臨時休業となった。年度末の学校の成績処理、学校行事は中止となり、児童生徒、学校教職員は混乱の中にあつたと推察する。さらに、感染状況の改善が見られないことから、4 月 7 日の政府による「8 都県の緊急事態宣言」、4 月 16 日に対象地域が全都道府県に拡大したことより、多くの学校が再びの「臨時休業」となった。

感染状況が落ち着きを見せ始めた 6 月初旬、学校再開に当たり COVID-19 については長期的な対応が見込まれる状況の中で、持続的に児童生徒等の教育を受ける権利を保障し、感染拡大リスクを低減したうえで学校運営を継続していくための指針（ガイドライン）が文部科学省から提示された²⁾。さらに、文部科学省は、上記ガイドラインの考え方にに基づき学校の衛生管理に関するより具体的な事項をマニュアルとして作成し、8 月 6 日の時点での最新の知見として Ver. 3 まで改定された³⁾。

学校現場は政府の考え方に沿って休業措置を取り、課題学習やオンライン学習の準備を進めてきた。8 月末時点ですべての学校は基本的に通常授業に戻り、「新しい学校生活様式」に基づき感染対策に留意しつつ教育活動を実施している。また、遅延している学習状況を鑑みて夏休み期間を短縮し、8 月末から 2 学期をスタートした学校も多い。教職員は、感染リスクを低減し学習活動を進めるために、児童生徒への感染対策指導、教室や関連施設・備品等の消毒、健康観察、マスク・フェイスシールド等の着用、手洗い、3 密を避けるために行事の変更・中止、児童生徒間のコミュニケーションの制限など多岐にわたる活動が追加されている⁴⁾。さらに、児童生徒は休業期間中の生活習慣の乱れ、オンライン等の学習への適応困難、スマートフォンや PC の液晶画面を注視する時間の変化による視力低下、注意力低下などの身体的健康問題や、イライラ、不安、気分の変動など行動自粛や他者とのコミュニケーション不足、友人との交友の縮小化などによるストレス反応が問題となっている⁵⁾。姿が見えないウイルスの恐怖と不安、感染防止がなかなか徹底しない児童生徒の行動、消毒作業や健康観察に加え COVID-19 による生活環境、人間関係の

変化による心身の健康問題を抱える児童生徒への支援におわれて教職員は疲弊しているのが現状である。

このような学校の状況の中で、教職課程を有する学部学科は教育職員免許法に規定される「教育実習」の準備を進めてきた。文部科学省からは4月3日付け事務連絡⁶⁾で慎重な感染対策に基づく教育実習の調整、5月1日付通知⁷⁾では実習期間の弾力化として1/3を超えない範囲で学内演習・講義の計画・実施可能と示された。さらに、8月11日「教育職員免許法施行規則の一部を改正する省令」が公布⁸⁾され、2020（令和2）年度限りの特例措置として「教育実習以外の科目の単位を持って充てることができることとする」となった。

COVID-19 感染拡大に伴う学校教育への大きな影響と教職課程における教育実習実施の内容、時期、期間等の変更は、実習予定校、都道府県・市町村教育委員会、教員養成校、そして教職課程履修学生に様々な影響を及ぼすこととなった⁹⁾。

城西国際大学看護学部は養護教諭1種の養成課程を有し、4年次6月に母校及び大学近隣の山武市、東金市の教育委員会の協力の下で養護実習を計画実施してきた。COVID-19 流行により2020年度4年生14人の実習校14校中12校が9月以降への実施時期変更、3校が実習期間の短縮となった。すなわち1校において時期の変更及び期間短縮の両方がなされた。感染者数が非常に少ない県の2校2人のみ6月の予定期間で実習を終了した。

養護教諭は通常、児童生徒の健康の保持増進、疾病予防、応急処置、保健指導及び健康相談、学校環境衛生管理等の学校保健活動を担っている。これに加え、COVID-19による生活環境、人間関係の変化による心身の健康問題を抱える児童生徒への支援の中核的役割を果たすこととなる。

COVID-19 流行期にある現在、3密を避け、消毒、マスク着用、手洗い励行、行動自粛を含めCOVID-19の感染予防対策は、養護教諭、保健主事、学校医等の学校保健の中核となる教職員に期待される役割は非常に大きくなっている。養護実習は、養護教諭の保健室経営に基づく保健管理、保健教育、健康相談活動、並びにチーム学校として特に健康を軸としての組織的活動について養護教諭の指導助言の下で学ぶ体験型学習である。このような時期に、養護実習を実施する養護課程の学生は、これまでの実習内容以上に「感染予防」「感染に対する保健指導」「健康観察と対応」「組織的な危機管理」などについて体験的に学ぶことができる貴重な実習となることが想定される。学生自身の感染対策も含め実習校におけるこのような貴重な体験と学びを明確化し、実習後の教職実践演習においてさらに深める必要があるとともに、今後の養護教諭養成教育における感染予防の役割と実際に関する教育内容の検討が重要であると考ええる。

研究目的

COVID-19 流行期における養護実習の感染対策及び児童生徒への支援に関する体験と学びを明確化し、今後の養護教諭教育への示唆を得ることを目的とする。

研究方法

1. 研究対象者

- (1) 2020 年度看護学部養護課程学生の養護実習実施校 14 校の内、本調査に関して承諾が得られた学校
- (2) 承諾が得られた実習校の養護実習学生の内、研究参加に同意した学生

2. データ収集方法

- (1) 自記式アンケート調査
- (2) 調査時期 2020 年倫理審査承認後～2020 年 12 月 31 日
また、成績等への影響をさせるため養護実習および教職実践演習などすべての養護教諭教育課程の終了後に調査を計画した。

3. 調査内容

- (1) 実習校の概要
- (2) 養護実習中に学生が認識した COVID-19 関連の感染対策活動
調査項目は、文部科学省（2020）による「学校の新しい生活様式」³⁾ 及び渡辺（2020）の小学校での学校再開に向けた養護実践¹⁰⁾ の感染対策活動内容を参考に作成した。
 - ①COVID-19 感染対策の実施内容（児童生徒、養護教諭、担任教員）
 - ②COVID-19 に関する保健教育・指導（養護教諭）、保健組織活動、情報交換
 - ③児童生徒の心身のストレス反応への養護教諭の活動（自由記述）
- (3) 養護実習における COVID-19 関連の実習体験と学び
 - ①感染対策に関して見学・実施した内容
 - ②感染対策において実習中に困難、むづかしいと感じたこと（自由記述）
 - ③感染対策において実習中に実施できなかった、実施したかったこと（自由記述）
 - ④COVID-19 感染対策に関する養護実習での学び（自由記述）

4. 分析方法

- (1) 実施内容や経験内容を項目ごと（あり・なし）の頻度を算出。
- (2) 自由記述は記述内容から意味ある記述を文節単位で抽出し、類似性でまとめる。

5. 倫理的配慮

- (1) 城西国際大学研究倫理委員会の承認を得た（承認番号 11Y200021）。
- (2) 対象者数が少なく実習校が特定される可能性があることから、実習校に研究の目的、方法、内容、養護実習学生が調査対象であること等を記載した研究計画書、研究実施のお願い及び研究の承諾書を送付し、承諾書の返送により承諾が得られた実習校の実習生を対象とした。
- (3) 調査対象の養護実習生には、実習終了後に開講する「教職（養護）実践演習」の科目終了後に調査の目的・方法・倫理的配慮・データの取り扱い、成績に一切関係しないこと等について説明文書と口頭で説明し、回収箱へ同意書及び回答の提出を依頼した。

結果

1. 調査対象

実習校 14 校のうち研究実施の承諾が得られたのは 11 校であった。これらの実習校で養護実習を行った学生の中で 調査への参加に同意した 10 人を対象とした。

2. 実習校の概要

表 1. 実習校の所在地域			表 2. 学校規模		
地域	実習校数・学校種別数		児童生徒総数	実習校数	養護教諭数
北海道・東北	2校	中 1 高 1	100人未満	0	
関東	6校	小 2 中 3 高 1	100～300未満	3	すべて1人
東海	2校	中 1 高 1	300～500未満	4	すべて1人
			500人以上	3	1校のみ2人

実習校 10 校のうち 6 校は関東地域であり、学校種は小学校 2 校、中学校 5 校、高等学校 3 校であった。学校規模を学生数でみると 100 人未満はなく、100 人～300 人未満が 3 校、300 人～500 人未満が 4 校、500 人が 3 校であった。また、養護教諭の配置は総生徒数 900 人以上の中学校 1 校のみ 2 人配置であった。

保健主事は、回答があった 8 人の実習校では小学校 1 校を除く 7 校が養護教諭以外の科目担当教諭であった。特に保健体育担当教諭が 5 校で、7 割以上であった。

3. 養護実習中に学生が認識した COVID-19 関連の感染対策活動

(1) 児童生徒の COVID-19 感染対策実施内容

図 1. に結果を示した。「大声で話をしない」は実施が少なかったが、ほかの行動は対象者の実習校ではある程度実施されていた。「マスク着用」と「自宅での検温・健康チェック」は 10 校すべてで実施されていた。

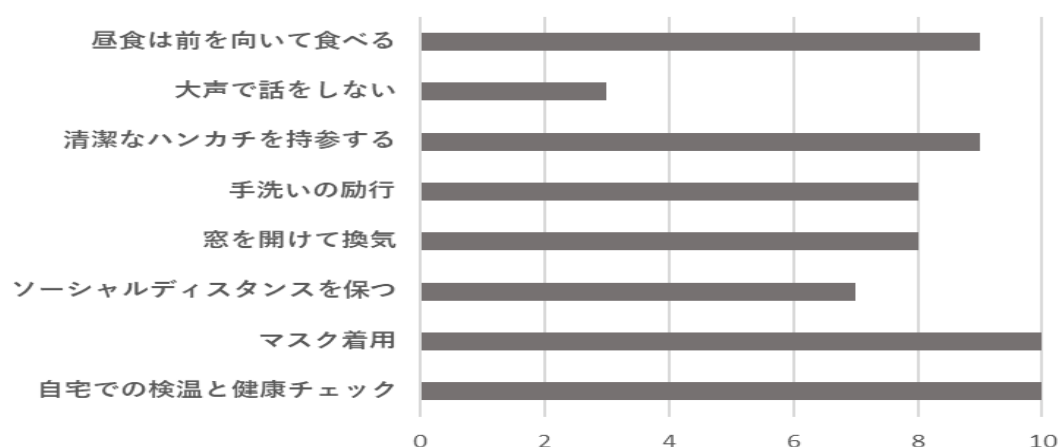


図 1. 養護実習生が認識した COVID-19 感染対策実施内容（児童生徒）

(2) 担任教員、養護教諭の COVID-19 感染対策実施内容

実習において養護実習学生が認識した担任教員、養護教諭が実施していた COVID-19 感染対策行動の回答結果を図 2. に示した。担任教員は「教室等の換気」「登校時の声掛けや児童生徒の様子観察」を実施している学校が多く、養護教諭は「トイレ・洗面所の清掃および消毒」「石鹸・消毒薬の点検と補充」「正しいマスク着用方法の指導」「正しい手洗い方法の指導」「自宅での検温未実施の児童生徒の検温実施」「健康観察表の回収と集計」を実施していた。

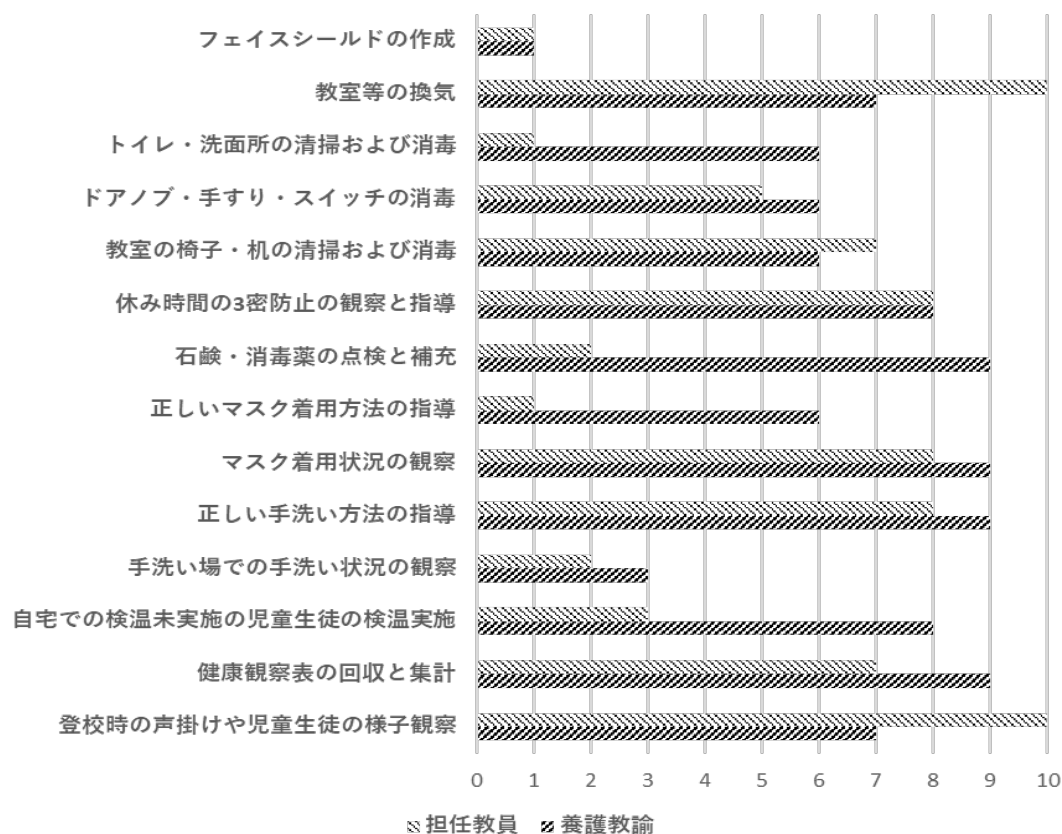


図 2. 養護実習生が認識した COVID-19 感染対策実施内容（担任教員・養護教諭）

また、学校種での違いを図 3. に示し、学校数が異なるため回答比率（％）で示した。小学校では「教室等の換気」「教室の椅子・机の清掃および消毒」「休み時間の 3 密防止の観察と指導」「石鹸・消毒薬の点検と補充」「正しいマスク着用方法の指導」など 14 項目中 11 項目で 2 校とも実施していた。中学校 5 校がすべて実施していたのは「マスク着用状況の観察」「正しい手洗い方法の指導」「自宅での検温未実施の児童生徒の検温実施」「健康観察表の回収と集計」の 4 項目であった。高等学校 3 校がすべて行っていたのは「休み時間の 3 密防止の観察と指導」及び「石鹸・消毒薬の点検と補充」であった。「フェイスシールドの作成」は 1 校のみ行っていた。一方、「手洗い場での手洗い状況の観察」と「正しいマスク着用方法の指導」は実施されていなかった。

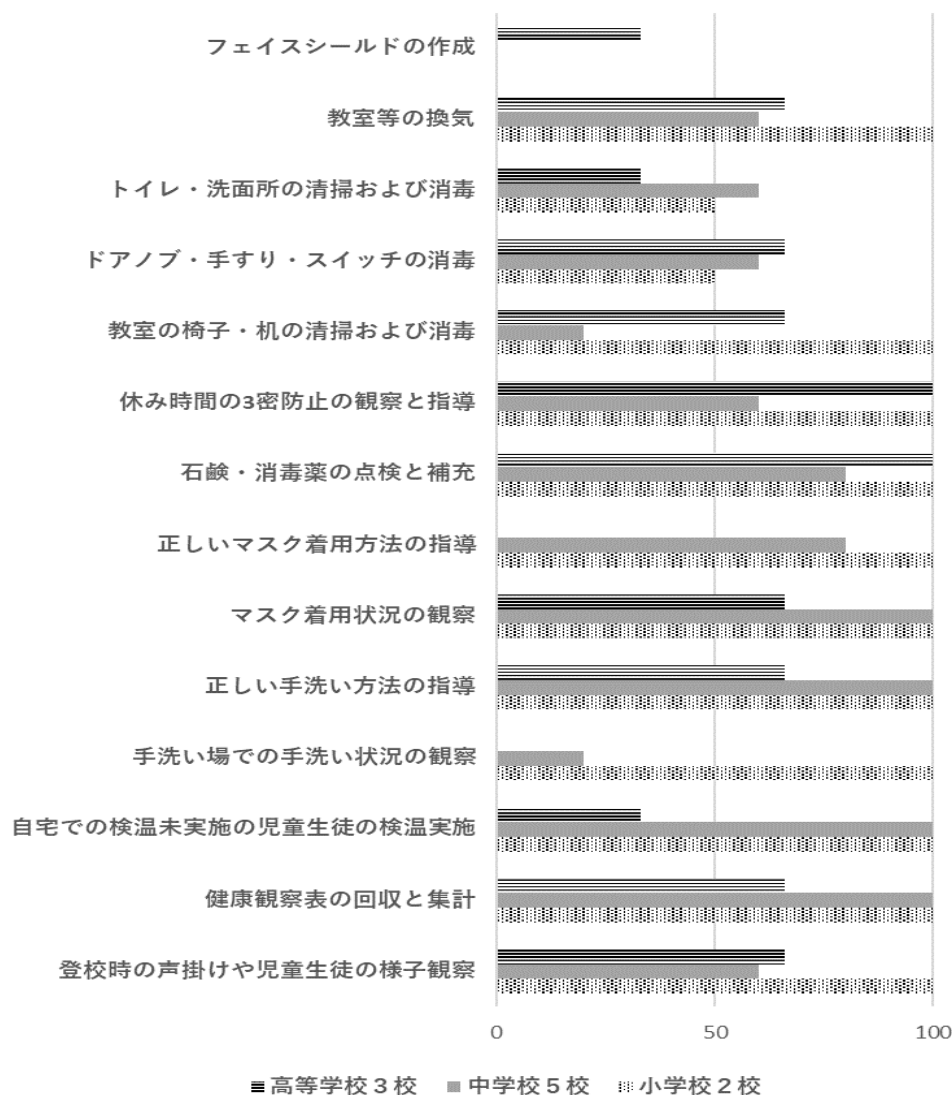


図3. 養護実習生が認識した COVID-19 感染対策実施内容（学校種別 比率%）

(3) COVID-19 に関する養護教諭による保健教育・指導、保健組織活動、情報交換

養護教諭による保健教育・指導については5項目、保健組織活動（以下「組織活動」）については3項目、情報交換については5項目を設定し、対象者に実習中に養護教諭がそれらを実施していたかの有無を質問した。図4. に結果を示した。養護教諭の保健教育・指導で多く認識されたのは「保健室に COVID-19 関連の掲示物を作成」8校、「保護者向け COVID-19 感染対策用「保健だより」の作成と配布」は6校であった。「組織活動」では「職員会議で感染予防対策について検討する」は9校であった。情報交換に関しては「養護教諭が職員会議で状況を報告し、意見交換する」「養護教諭と担任教諭に個別に情報交換する」「養護教諭・保健主事が委員会、職員会議等の相互で情報交換」は半数程度において認識されていた。一方、「COVID-19 に特化したチームに情報を集約して意見交換する」ことは実習中には認識されていなかった。

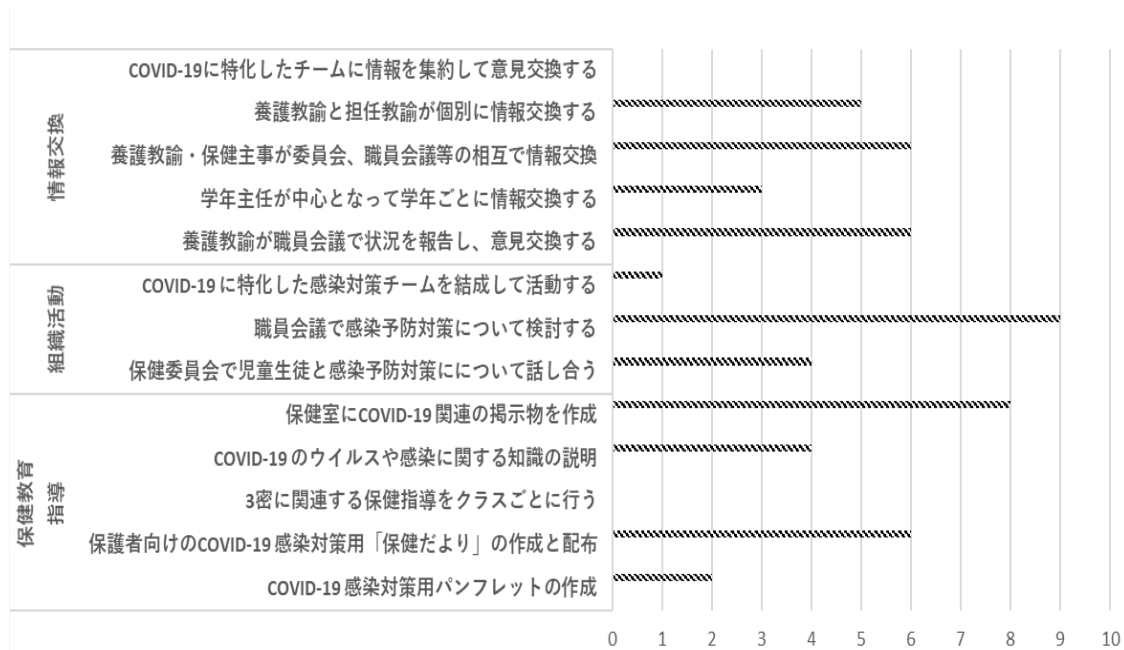


図4. 養護実習生が認識した COVID-19 に関連した保健指導、組織活動、情報交換

(4) 児童生徒の心身のストレス反応への養護教諭の活動

自由記述内容を類似性によりまとめた。10 人の対象者すべてが「傾聴」と記述し、「優しく声掛け」「スクールカウンセラーにつなげる」「身体的訴えの観察」「毛布で包み込みタッチング」を合わせて行っていたことを認識していた。

4. 養護実習における COVID-19 関連の実習体験と学び

(1) 学生が実習内容として見学・実施した COVID-19 関連の感染対策活動

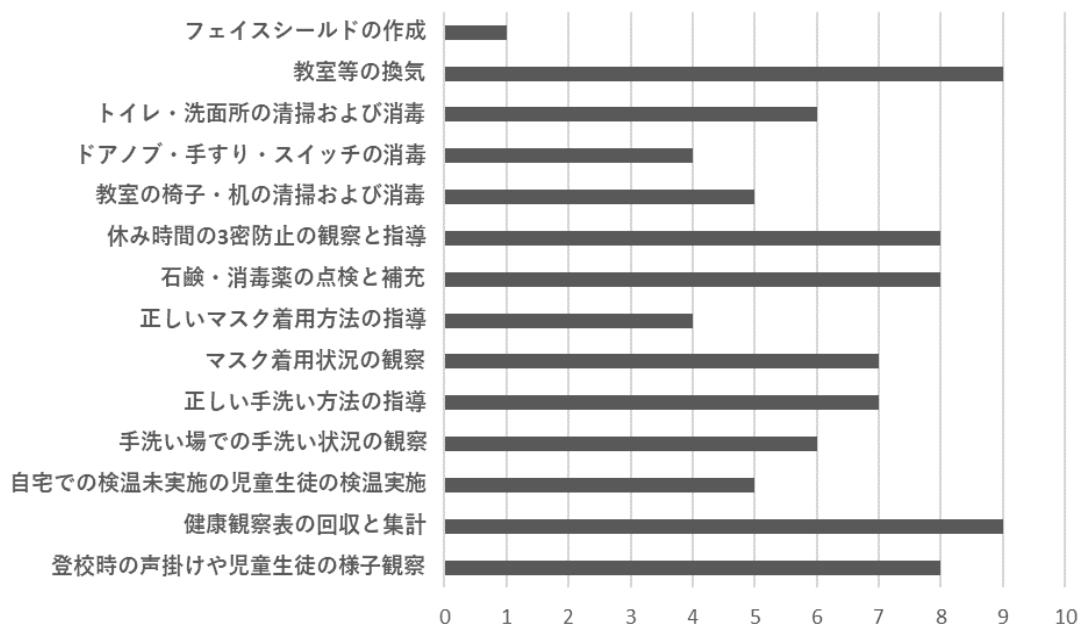


図5. 養護実習生が見学・実施した COVID-19 感染対策実内容

図5. に示すように、「教室等の換気」「健康観察表の回収と集計」「休み時間の3密防止の観察と指導」「石鹸・消毒薬の点検と補充」「登校時の声掛けや児童生徒の様子観察」は8人以上の養護実習生が体験していた。一方、「ドアノブ・手すり・スイッチの消毒」「正しいマスク着用方法の指導」は5人以下であった。「フェイスシールドの作成」は1人であり、その実習校では担任教員及び養護教諭が「フェイスシールドの作成」を実施していた（図2. 参照）。

(2) 学生が実習内容として見学・実施した COVID-19 に関する保健教育・指導、保健組織活動、情報交換

図6. に学生の実習体験状況と養護教諭及び教員の活動を合わせて示した。保健教育・指導に関しては、10人の対象学生の半数が「保健室に COVID-19 関連の掲示物を作成」を体験し、4人は「COVID-19 のウイルスや感染に関する知識の説明」を行っていたが、「3密に関連する保健指導をクラスごとに行う」は体験できていなかった。組織活動では教員が「職員会議で対感染予防対策について検討する」ことは9人の学生が認識していたが、実習生として体験できていなかった。情報交換は「COVID-19 に特化したチームに情報を集約して意見交換する」は体験されていなかった。教員による情報交換はある程度認識されていたが、学生が実習中に体験することは少なかった。

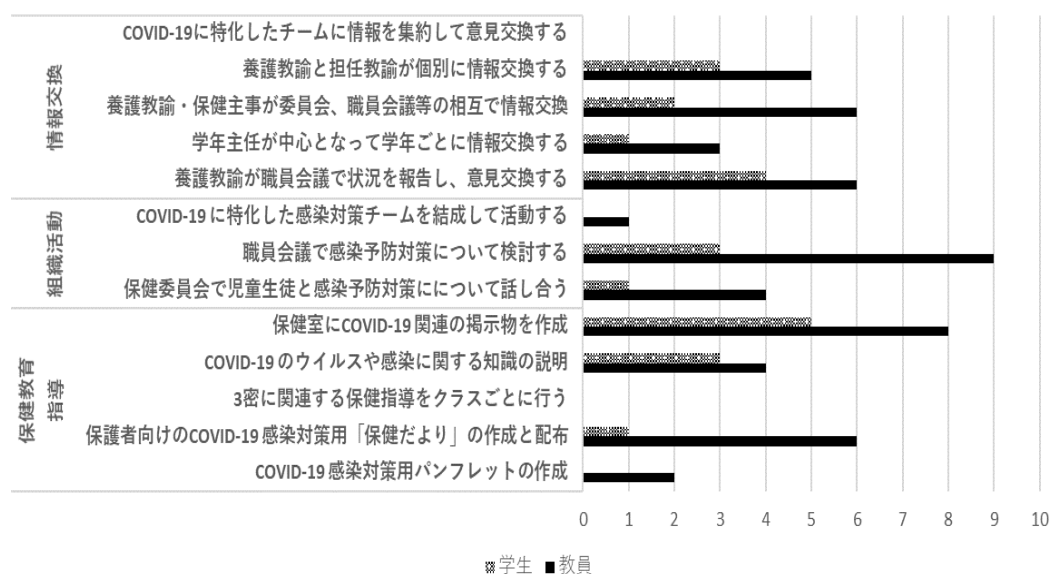


図6. 養護実習生が見学・実施した COVID-19 感染対策実内容

(3) 児童生徒の心身のストレス反応への支援（自由記述）

10人中6人が「傾聴」と記述していた。また「情報提供」「訴え内容の観察」「助言」を実施していたことが明らかとなった。

(4) 感染対策において実習中に「困難、むづかしいと感じたこと」及び実習中に「実施できなかった、実施したかったこと」（自由記述）

「困難、むづかしいと感じたこと」では、「手洗い指導において水が冷たく児童生徒が苦痛を感じて

いた」「気温が低いことで換気が困難」「ソーシャルディスタンスのむづかしさ」「接近ができないことによるコミュニケーションの困難」の4点が記載された。「実施できなかった、実施したかったこと」では、「保健だよりやポスターの作成」「児童生徒との積極的なコミュニケーション」の2点であった。

(5) 養護実習における感染対策に関する学び（自由記述）

小学校において実習した学生は、「児童のソーシャルディスタンスのむづかしさ」「学校生活の多くが制約されることから子供たちの楽しみを奪わない取り組みの大切さ」「教職員や保護者の自己管理の現状と協力体制の実際」が記述されていた。中学校で実習した学生は、「生徒の家庭環境を含めた個別性に合わせた援助の必要性」「教職員への感染予防行動の指導と行動変容の重要性」「感染対策の実際と徹底した実施」「心のケアの重要性」「保健室の管理の工夫」を記載していた。高等学校で実習した学生は、「指導の繰り返しの重要性」「教職員の感染対策行動の負担の増加」「心身のバランスを崩す生徒への支援」「養護教諭の専門性・知識・信頼が必要」が学びとして抽出された。

考察

1. 学生が認識した COVID-19 関連の感染対策活動

感染対策行動の中で児童生徒自身が基本的に「すべきこと」である「マスク着用」「前を向いて食べる」「自宅での検温と健康チェック」は実施されていることを学生は把握していた。また、養護教諭のみならず教職員が日常の感染対策行動として児童生徒の観察、教室等の消毒、換気を実施していることを把握していた。学生の回答から、改めて養護教諭は全校の児童生徒に係る環境整備、感染対策に関する指導的役割を担い、教員は担当するクラスの児童生徒に関わる活動を実施していることが明らかとなった。通常の校務に加えて感染対策活動が付加され煩雑多忙な教育現場の現状を学生が理解できたと考える。さらに、養護教諭が実施している保健教育・指導、教職員の保健組織活動や教員間の情報交換については、教職員相互の情報交換や職員会議での検討を実際に知る機会を得ることができたことは重要な実習体験であった。

2015（平成 27）年の中央教育審議会答申において、複雑化・多様化した課題を解決していくために「チームとしての学校」を作り上げていくことの重要性が提言された¹¹⁾。まさに COVID-19 対策に特化したチーム活動は、チーム学校を構築するために重要な「専門性に基づくチーム体制の構築」「学校のマネジメント機能の強化」「教職員一人一人が力を発揮できる環境の整備」の実現の機会であると考えられる。回答結果からはこのような活動は認識されなかったのは残念であった。養護概説の中で保健組織活動としてこの動きを説明している。実習時期が4月の緊急事態宣言解除後一定の時期が経過した後であったことも一因となると考えるが、学生自身への意識づけが今後の課題である。

児童生徒の心身のストレス反応への養護教諭の支援については、「傾聴」だけではなく観察と援

助を丁寧に観察していることが明らかとなった。学生自身の養護実践としての学びにつながっていくことが期待できる。

2. 学生の COVID-19 関連の実習体験と学び

感染対策活動として提示した 14 項目の内、「フェイスシールドの作成」については 1 人のみであったが、13 項目は 4 人（4 割）以上の学生が体験していた。「3 密防止」「マスク着用」「手洗い」「換気」「健康観察」など COVID-19 の基本的な感染対策について、実施や指導を体験していたことが明らかとなった。

保健教育・指導、保健組織活動、情報交換では養護教諭を含む教員の実践内容を養護実習生が認識した頻度までには実習生として体験できていない現実が明らかとなった。例年の養護実習は 6 月実施のため、感染対策に関しては「食中毒」が主体であった。また保健教育・指導では「熱中症」「歯の健康」「目の健康」など健康診断に関係した内容が多く、保健だよりや掲示物の作成を実施していた。一部の学生は保健教育の一環として授業形式でクラス単位の指導を展開した。今年度は調査対象 10 名のうち 8 名が実習時期の変更となり、9 月以降に移動した。COVID-19 の感染状況は、4 月の第 1 波から回復し比較的安定してはいたが、6 月末から徐々に再燃し 8 月初旬にピークとなった第 2 波が発生した¹²⁾。対象者の内 9 月中旬以降に時期が変更となった 8 人の養護実習は、その後落ち着いたと認識されていた時期に実施していたことになる。学校生活は「新しい学校生活様式」として、感染対策をしながらの生活様式となった。養護実習において養護教諭や教員の感染対策活動として認識したことをすべて実習として体験できるわけではないのが「実習」の課題である。〔実習としてすべきこと〕と〔実習でできること〕の間の乖離は、実習指導体制や実習環境に大きく依存することから、この時期の養護実習として、〔認識したこと〕を〔実施したいこと〕として主体的に考え、実習指導の養護教諭に相談する能動的な態度が課題であると考ええる。

3. 困難や学びから

小学校では指導しても「3 密がなかなか避けられない」「ソーシャルディスタンスが保てない」困難さを体験し、中学校や高等学校では生徒の個別性に応じた支援、心のケアなどについて学んでいたことが明らかとなった。実習校の教職員の多忙な教育業務について目の当たりにしたことは実習でしか学べないことである。また、コロナ禍と称されるように、本当ならば児童生徒と密接にかかわり、コミュニケーションをとることを通して心に寄り添い、健康相談活動につなげるという実習目標を設定しているが、物理的距離としてディスタンスはコミュニケーション不足や困難の要因となり、学生のジレンマがあることが明らかとなった。学びだけではなく葛藤しながら養護実習を展開していたのではないかと考える。

終わりに

COVID-19 流行期の養護実習の中で感染対策に関する貴重な体験と多くの学びが得られたことは、実習校の養護教諭の支援と指導及び実習校の教職員の皆様の教育実習への理解によるものであることを痛感した。また、学生自身が自分自身の健康管理の重要性を強く認識しつつ、実習に臨み、葛藤しながら実習していることを把握することができた。

次年度養護実習を予定している3年生に対して、実習事前面接・模擬健康相談を3月に実施することとなるが、今回の調査結果を基に実習準備やオリエンテーションに活用していきたいと考える。

文献

1) 文部科学省 (2020) : 新型コロナウイルス感染症対策のための小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校等における一斉臨時休業について (令和2年2月28日付け通知)

https://www.mext.go.jp/a_menu/coronavirus/mext_00006.html

2) 文部科学省 (2020) : 新型コロナウイルス感染症に対応した持続可能な学校運営のためのガイドライン及び新型コロナウイルス感染症対策に伴う児童生徒の「学びの保障」総合対策パッケージについて (令和2年6月5日付け通知)

https://www.mext.go.jp/a_menu/coronavirus/index_00012.html

3) 文部科学省 (2020) : 学校における新型コロナウイルス感染症に関する衛生管理マニュアル～「学校の新しい生活様式」～ (2020, 8, 6Ver.3)

https://www.mext.go.jp/a_menu/coronavirus/index_00012.html

4) 日本健康教育活動学会 (2020) : 緊急Web調査 新型コロナウイルスに関する養護教諭の実践緊急アンケート (5月2日中間報告)

<http://jahca.org/top/sb.cgi?eid=217>

5) 熊本日新聞 (2020, 9, 02) : コロナ、不安や悩み28%、熊本県教委が児童生徒調査

<https://news.yahoo.co.jp/articles/0b163d186a4848cb1354e6a8fbfd702a6551b6a4>

6) 文部科学省 (2020) : 「令和2年度における教育実習の実施に当たっての留意事項の送付」について (令和2年4月3日付け事務連絡)

https://www.mext.go.jp/a_menu/coronavirus/index_00012.html

7) 文部科学省 (2020) : 令和2年度における教育実習の実施期間の弾力化について (令和2年5月1日通知)

https://www.mext.go.jp/a_menu/coronavirus/index_00012.html

8) 文部科学省 (2020) : 教育職員免許法施行規則等の一部を改正する省令の施行について (令和2年8月11日通知)

https://www.mext.go.jp/a_menu/coronavirus/index_00012.html

9) 朝日新聞デジタル記事 (2020) : 教育実習に特例措置 やむ得ない場合、なしで免許取得

も

<https://www.asahi.com/articles/ASN8C66QNN8CUTIL01B.html>

10) 渡辺誓代 (2020) : 小学校での学校再開に向けた養護実践、日本養護教諭教育学会誌、Vol. 24、No. 1、3-8.

11) 文部科学省 (2015) : チーム学校としての在り方と今後の改善方策 (答申)、平成 27 年 12 月 21 日、中央教育審議会

12) NHK デジタルニュース: 【データで見る】 “第 3 波” 第 2 波との違いは 新型コロナ (2020 年 11 月 17 日)

<https://www3.nhk.or.jp/news/html/20201117/k10012716911000.html>

『教育実習を終えて』

筒木 友梨（国際人文学部）

実習先・教科：長野県公立中学校・英語

〇はじめに

私の実習校ははととても小さな学校で中学 1 年生 1 名、中学 2 年生 2 名、中学 3 年生 3 名の合計 6 名の学校でした。そのため、3 週間授業参観や実習は 3 学年すべてを担当させていただきました。また、小中併設校のため小学校の授業参観や 3～5 年生の外国語の実習もさせていただきました。そして、学活や朝の会などは中学 2 年生のクラスで過ごさせていただきました。道徳と、学活の授業の実習もさせていただき、部活はバドミントン部を見させていただきました。

〇実習前の取り組み

教育実習前は、事前に中学生の英語の教える範囲を復習したり、文法の教え方や教材づくりをしたりしました。授業参観では、文法や読解だけでなく、スピーキング力をつけるため、伝えたいことを絵にして話したり、質問をスムーズに言えるように **Small Talk** をしたりして、スピーキング力やリスニング力をつけていました。また、学生が学ぶことに抵抗を無くすために、**Reading** や文法からではなく聞いて、話して、読んで、書くという順番を心がけていることに気づきました。

〇実践・授業

Today's Plan を達成するために授業構成を考えることに心がけてはいたのですが、実際授業を行うと時間配分がうまくいかなかったり、予想していた答えが返ってこなかったりなど授業をコントロールするのがとても難しかったです。また、教師がすべて文法を教えるのではなく、学生が文法の規則に気づけるように促す活動を意識して授業構成を行いました。また、歌手グループの嵐や、ペッパー君、学生の幼いころの写真など身近なものを使って英語に触れやすくなるように心がけました。

〇検証・学生の反応

本文の穴埋めを **CD** を聞いて行う活動や、分詞の文の作り方など文法が難しくなってしまうと、問題を解くのにつまづいてしまう学生もいました。しかし、カルタやフルーツバスケットなどのゲームを行って文法を学ぶと問題がしっかりとけるようになり、聞いて、話すことの大切さを改めて感じました。私が学生の頃より今の学生は一人で話す力があり、聞く力もあると感じました。

〇改善点・課題点

本文を **CD** を聞いて穴埋めする時や、文法の問題文を作る時に連語の確認や、新単語、文法など多くのことを理解できているか確認する穴埋めを作ってしまった、一つに絞る必要がありました。そのため、穴埋めの目的を明確にし、どこを穴埋めにするかもっと考える必要があると学び

ました。Today' goal を達成するために授業構成を考える必要があるが、教えたいことが多くなってしまい、一回の授業で多くのことを詰め込みすぎてしまい、達成できたのかわからなくなっていました。そのため、一回の授業で教えることを明確にし、1 つに絞り、Today's goal を学生がよんでもわかりやすくする必要があると学びました。

○これから実習に行く皆さんへ

事前に実習を行う範囲を聞き、教育実習が始まる前に文法や教材の準備などをしておくと思います。また、学生や先生とかかわれる時間は実習期間中だけなので休み時間や放課後など積極的に教室に行き生徒について理解する時間を増やすと実習で緊張しにくくなると思います。そして、指導してくださる先生方に感謝し、わからないことや気になったことはすべて質問すると思います。

『教育実習レポート』

川平 穂乃花（国際人文学部）

実習先・教科：茨城県公立中学校・英語

① 教育実習前の取り組みから、終了までの概要

P：実習前計画、取り組み

実習前の計画と取り組みとしては、教科教育法で主に模擬授業があったので、教育指導案の書き方や、授業構成について不明点について積極的に質問していききました。実習校と連絡を取ってからは、電話や事前打ち合わせで準備物や、使用教科書や担当単元、担当学級について確認し、ざっくりではありますが、どのようなスタイルで教えていきたいか、教案は事前に必要かを話し合いしました。担当指導教官の先生が実際に授業参観を行ってから、私の担当個所指導案製作開始ということだったので、事前に準備する物は特にありませんでした。

D：実践、授業

実際の授業では、三日ほど前に指導案を添削してもらい、訂正と再確認、教材が必要な時は教材を製作しました。私は2クラスあったので、1回目の授業のあとに軽くフィードバックをしてもらい、次のクラスに向かうという流れでした。授業では、ウォームアップ、リスニング、スピーキング、ライティング、ワーク(まとめ)を行っていました。私が毎回指摘をうけたのはもっと自信をもってやってほしいという部分でした。緊張が生徒に伝わってしまい雰囲気づくりがしづらい環境になってしまいました。教師が一番楽しんで授業を行う事で、生徒もたのしんでくれるとご指導いただきました。また、発言の多い生徒に頼ることが多かったのですが、英語が苦手でも楽しんでくれる生徒、一生懸命に取り組んでくれる生徒のサインや発言をもうすこし大切にしていける事が足らなかったもので、教える内容ももちろん大切ですが、クラスコントロールについても学びが多くありました。

C：検証、学生の反応

私が一番授業で悩んだのが、ウォームアップです。ウォームアップは授業の最初に行うので授業の雰囲気づくりや生徒のやる気や興味を引き出す効果があります。私の担当は一学年だったので、子供たちが小学校で行っていた馴染みあるアクティビティから、指導教員の先生からのアドバイスをもとに、全員が楽しめそうな活動を準備しました。子供たちのほとんどが楽しく参加してきていましたが、中には決まったフレーズを言えず日本語で話してしまう子や、パートナーを作れなかった子がいたので、机間指導を行い、生徒と活動に参加しました。英語が楽しくなったと言える生徒が複数いたので本当に嬉しかったです。

また、私は単元を通して自分の留学体験を紹介しました。私の経験をもとに、子供たちが海外について何でもいいので興味を持ってほしかったからです。留学紹介後のワークシートにはほとんどの生徒が粹いっぱい感想を書いてくれていて、こんな話しても、、と思っていた私ですが、予想以上に効果があったので、これはこれからも活用していきたいと思いました。

A : 改善点

改善点としては、もっと自信をもって授業を行う事、楽しむことです。先生が楽しんでいないと、生徒も楽しく学んでくれないし、不安が伝わってしまいます。今回の実習では、授業の技術よりも先に、楽しく、自身を持つことの重要性を実際に痛感しました。

②後輩へのアドバイス

いろいろなことに緊張していると思いますが、現場の先生方が教育実習生に期待することは授業技術ではないです。もちろん一生懸命授業構成を行う事、準備は大切ですが、それよりも、普段どうやって生徒と接しているのか、明るさや若さを生かして短い実習生活で生徒と思い出を作ることだと感じました。授業で精一杯にならず、普段の何気ない時間を有効に過ごしてください！

『教育実習を終えて』

川原田 創司（経営情報学部）

実習先・教科：岐阜県私立高等学校・公民

○はじめに

私は、自身が実際に通っていた母校にて、三週間の教育実習を行いました。今回は、新型コロナウイルスの影響で、実習の時期や期間に多少なりとも変更があったものの、母校でもある実習校のご協力もあり、何不自由なく貴重な時間を過ごさせてもらうことができました。人に何かを「伝える」ということに魅力を感じる私にとっては、これから自身が歩んでいく人生に必要な“気づき”を得ることができました。

○実習前の取り組み

事前指導は特にはありませんでしたが、指導担当教諭から「あなたが教育に興味を抱いた理由」という事前課題を頂きました。そこでは、これまでの私の学生生活や、幼い頃から続けているサッカーを通して感じた、私自身が思う「教育の魅力」について書きました。それと同時に、この魅力を「教える側」から実感し、そこでの“気づき”を自身の三週間のテーマと課しました。

又、私の専門は公民であるため、教科の専門知識は勿論、それを補足できるような関連知識を自分の身近なサイズで準備しておくようにしました。そのように、「専門的な内容に、いかに生徒の聞き耳を立てられるか」というところに焦点を置き、実習に挑む事前準備に努めました。

○実践・授業

私は、HR（ホームルーム）として二年生を受け持ち、主には、朝礼・終礼・日誌の点検での接する機会がありました。ここには、生徒が一日のスケジュールと共に、その日の感想を書いて毎朝提出をする日誌がありました。私は、そこでの感想文に対する返信を学級業務として任せられていました。朝終礼でしかコミュニケーションを取る場がないことから、少しでも距離を縮められるように、返信と次の日の感想文が会話として成り立つように“質問“をしてみたり、直接話をする方向に誘導するような返信をしてみたり、とにかくコミュニケーションを成立させることに尽力しました。

又、授業実習は一年生を担当しました。ここでの難点は、授業以外で接する機会がない点であり、実際にも、実習序盤は多少なりの距離感を感じたままの授業が続きました。ここでも、なんとかコミュニケーションを密に取りたく、授業の前後や導入部分で、生徒と“言葉のキャッチボール“ができる機会を設けることに努めました。さらに、指導担当教諭の助言もあり、授業構成にグループワークを設けることで、生徒と教師、生徒と生徒のコミュニケーションが格段に増加し、「動き」のある授業作りに繋がりました。

○検証・学生の反応

上記のように、授業内外のコミュニケーションに積極的に注力しました。それにより、授業内では、授業回数をこなす度に生徒のリアクションは増え、授業外では、生徒からコミュニケーションを取ってもらえるようになりました。特に、授業の範囲外の会話が充実していくにつれ、授業での生徒の反応が

良く向上していくことを成功体験として実際に感じられたことで、私自身の中での生徒から見る教育の魅力と、教師から見る教育の魅力が一致し、私の中での「教育」が明確になったように感じました。

○改善点・課題点

私はこの期間、常に挑戦と改善を意識していたため、自身が持つ 100%をこの三週間に注ぎ尽くしたと感じています。特に社会科的な教科には「正解」が必ずあるため、事前準備を充実させることさえできれば、大半は問題なく進行していけると思います。しかし、三年時等の事前教科指導を含め、「伝える」ための準備に限界はないことを感じました。どうしても教える側としては「正解」がわかっているため、単発・一方的な授業になってしまいがちです。そこでの、“どうすれば伝わるか” “どうすれば理解が得られるか” への努力は、実際の“授業”という時間が来るまで試行錯誤を怠ることのできないものでした。

○これから実習に行く皆さんへ

私は、介護等体験や様々な実習体験で重要視していることは、「気づき」を得ることです。実際私も、今実習前はとても多くの不安がありました。しかし、“たかが実習”です。上手くいかなくても、何も行動を起こさなくても、時間は過ぎ、終わりはやってきます。しかし、“されど実習”です。色々な先輩から、「教育実習楽しかった」という言葉を聞いたと思います。挑戦を恐れず自分から行動を起こせば、どんな形であれ、自身の何ものにも代え難い経験値が、自分自身の実体験として返ってきます。「失敗は成功のもと」とは良く言ったもので、挑戦・失敗・改善の繰り返しが、“教育実習”を自身にとってより良いものにする唯一の秘訣です。

『教育実習を終えて』

宮城 律希（経営情報学部）

実習先・教科：沖縄県公立高等学校・保健体育

○はじめに

3週間の教育実習を終え、振り返るとたくさんの成長があったと感じている。1週目は実習生としての意識を十分に持ちながらも多くの緊張があった為、生徒との交流もなかなか思う様にできず、積極さに欠けていたという印象がある。2週目には環境や日程の慣れから、他の視点での授業作成や授業者の見学に多く行くことができた。また、関わる生徒のことも少しずつだが理解できる様になり、楽しいもつとたくさん経験し成長したいと感じる様になった。そして3週目は研究授業を間近に迎え、しっかりと授業に取り組もうと意識した。その結果いつも以上に吟味して授業を作成した為準備に時間がかかるなどと多く失敗した。そこでも自分が思う様な授業が展開できる事はなかったが1つ1つ着実に進歩しているという認識はあった。自分が最低限できることを整えて臨むことができれば授業としては成り立つ。そこで生徒がいかに関心することができ、授業事態を楽しめることができるのか。ということを担当の富田先生をはじめとする他の教職委員と話しあったり、他の実習生からアドバイスをもらうなどと、授業の質を高めるよう努めた。そして迎えた研究授業だったが練っていた授業構想を思うように取り組むことができず、悔しい結果に終わってしまった。教育実習生徒として常に授業を評価していただき、質を高める為より良い授業を行う為改善しながら成長を図った教育実習の期間は非常に貴重なものであったと感じる。今回感じたことを忘れず、今後の教職員人生を充実したものにしたい。

○実習前の取り組み

実習前には実習校に挨拶に行き、担当の先生と打ち合わせをした。そこで自分が今回担当させてもらう範囲を認知し、大学で学んだ保健体育科教育法を通して、ある程度の教材を準備していた。また、母校であった為高校時代にお世話になった先生方や部活動への挨拶、練習への参加を欠かさず行った。そこで意識した取り組みとして、大学で周知のあった規律を重んじ行動をとった。

○実践・授業

教科教育法等での実践での緊張はあまりなかったが、教育実習では非常に緊張したことを覚えている。初めは人前に立つと声や字が震え、まともに話すことができなかった。また、体育の授業では笛を吹くことが意外にも難しく苦戦した。授業を多くの数経験させてもらった為、徐々にだが授業内容の細部までに意識が届く様になり、改めて授業展開の方法には奥深さを感じた。担当の先生と試行錯誤を続け、研究授業では自分が展開したい授業を行おうとしたが、正直悔いの残る研究授業に終わった。あの授業は今後も一生忘れることがないだろうと感じる。

○検証・学生の反応

研究授業には多くの先生方がいらしてくれており、その反応は意外にも良かった。「堂々として一番先生らしかった」「導入部分が非常に面白くて、見入った」などと自分の自信につながる様な言葉を多く頂いた。しかし、授業中に学生が寝てしまっていたことは、自分授業内容に欠ける部分があると感じる為、そこは学生からの正直な感想として重く受け止めたい。

○改善点・課題点

授業内で見つかった課題点として、発問の方法、授業のまとめ、授業で最終的に伝えたいことを明確にする。ということがあった。教科教育法では感じ取れなかった生徒のリアルな反応が今回の課題発見へ導くことができた。また授業準備もかなり時間を要してしまった為、今後は前もって行動することを意識して望みたい。

○これから実習に行く皆さんへ

朝は6時半に学校に到着して、遅い日には22時まで学校に残って教材研究をしました。毎日睡眠不足でした。徹夜もしました。自信がなくなることもありました。自分の実習が大変だったとアピールしているわけではありません。実習最後には涙をするほどの寂しさもありました。自分が成長できたという自負もあります。私にとって教育実習の経験は感無量です。心して望んで、実りのある実習にしてください。

『教育実習を終えて』

大須賀 智哉(経営情報学部)

実習先・教科:茨城県公立高等学校・保健体育科

〇はじめに

私は、北茨城市立中郷中学校で3週間教育実習を行いました。科目は、保健体育を行い、バレーボールと保健を行いました。3週間と短い期間でしたが、担当の先生や他の先生にアドバイスしてくれたことで教育実習を無事終わることができました。実習前後を比べると、考えたことや感じたことがたくさんありました。実習前では、分からなかったことや気づかなかったことがたくさんあったけど、実習を行ったことで身に付けないといけないことがたくさん見つかりました。実習を無駄にしないように今後活かしていきたいです。

〇実習前の取り組み

実習前の取り組みとしては、2つ行いました。1つ目は、教材研究です。バレーボールと保健（喫煙・飲酒・生活習慣病）を行うことが知っていたので、バレーボールのルールや生徒が楽しく成長するためにはどうすればいいのか考えました。バレーボールのルールを知らないと教えることはできないのでバレーボールのルールを覚えました。生徒が楽しく成長するためには、どのような練習をするのかを考え、大学の授業で学んだことを振り返って授業の構成を考えました。また、保健では、教科書通り行うのではなく教科書にないことも生徒に教えていきたいと考えていたので、バレーボールの知識を多く身に付けられるように調べて覚えました。保健はPowerPointを使って行うことも含めて構成も考えました。PowerPointを生徒に見やすくするためには、文字の大きさや量を考えました。大学の授業で、授業の中で実体験などを話すことが大切であることを学んだので実習前に知識を増やそうと思い調べました。

2つ目は、生徒の名前を覚えることです。中学校から名簿をもらっていたのでそれを見て覚えました。中学校に行って生徒の名前を覚えていないと生徒に話しかけづらいと考えていました。生徒の名前を覚えるのは、顔写真がなかったので覚え方が難しかったです。漢字も難しいのもあって実習前に全生徒を覚えることはできなかった。実習の1週目は、生徒の写真はなかったので、中学校に行った時に顔と名前が一致しないことがありました。

〇実践・授業

授業実習では、バレーボールと保健（喫煙・飲酒・生活習慣病）を行いました。担当学年は、2学年でした。バレーボールでは、基礎的な技能を身に付けることをテーマに行いました。基礎的な技能を身に付けさせるために、ポイントを決めて伝え、運動量を多くすることを意識しました。得意な生徒と苦手な生徒がいたので、苦手な生徒にどう伝えればできるようになるか考えました。苦手な生徒には、1対1で見本を見せてポイントの確認を行い、生徒が理解できてできるように指導しました。ゲームを行う中で、得意な人に合わせるとゲームになれないことが分かり、苦手な生徒でもできるようにルールを考えることの大切さが分かりました。

保健では、PowerPointを使って授業をしました。まず、PowerPointを作ることが大変でした。

生徒が理解しやすく見やすいのを作ることが難しかったです。文字の大きさや量を考え、生徒に伝えたいことは何かを決めて授業を作りました。また、教科書や PowerPoint だけではなく単元で役に立つ知識や実体験を話すことが必要であり大切なことが分かりました。そのためには、たくさんの知識があり実体験を話せるようになる必要があることを実感しました。

○改善点・課題点

改善点は、準備不足だと思います。準備はしたけど全然足りなかったです。授業を作る中で、構成や生徒のことを考えて作ることが必要でした。バレーボールのことをもっと知ることによって練習内容やゲームのやり方などの幅が広がり、生徒たちが楽しい中で技能を身に付けられると思いました。実習始まる前から準備を始めて生徒の技術面を考慮した上でテーマに沿った練習やゲームを行えるようにしたいと思いました。また、時間配分です。この練習は何分行うのかゲームは何分行うのかを考えていたが、ゲームの時間が少なくなったことがありました。指導案通りにはなかなかいかないことが分かり、時間を考えて進めることができなかったことが改善点です。改善するために、指導案で考えるのと授業中に対応できるようになる必要があることが分かりました。

今回の実習で分かった改善点や課題点を今後活かせるようにしていきたいです。そのために、実習であったことを忘れないで改善できるように学んでいきたいです。大学の授業や家でできることを考えて少しで身に付けられるようになり、成長していきたいです。

○これから実習に行く皆さんへ

実習の前は、何をしたいか分からないことが多いと思います。1番してほしいことは、準備です。準備でもたくさんあるので何をしたらいいのか分からなくなると思います。自分がした方がいいと思ったのは、単元について調べることです。もし、バレーボールだったらルールや練習方法などバレーボールのことを学び覚えることが大切です。ルールや練習方法を知っておくことで、生徒にポイントなどを指導することができ、得意な人と苦手な人の差が少なくなると思います。また、単元につながる知識を身に付けることです。教科書には出てきているけど生徒は知らないことを伝えることができ、生徒が多く知識を身に付けられることにつながることであります。教育実習は、緊張や不安はあると思いますが、学びに行くので失敗を恐れずに積極的に行っているんなことを学んでください。

『教育実習を終えて』

奥山 嘉月(経営情報学部)

実習先・教科:栃木県公立中学校・保健体育科

①教育実習前の取り組みから、実習終了までの概要

P(実践前計画、取り組み)

新型コロナウイルスの影響で実習校での事前指導がなくなり、実習当日に実習中の流れを確認した。初日に授業実践の計画や内容、研究授業についても説明を受けたため、実習の前に授業実践や研究授業に向けた準備をして実習に臨むことはできなかった。しかし、大学の事前指導の内容や保健体育科教育法の先生方に私が模擬授業を行った際のフィードバックをしていただき、アドバイスしていただいたことをまとめ、自身の心得ておくべきことについては確認しておくことができた。

D(実践、授業)

全体の流れとしては、1週目が基本的に先生方の授業参観を行い、2週目の前半がTT、後半からは徐々に授業実習になった。最後の週は天候等の関係でTTになったところもあったが、授業実習や研究授業を行った。

保健体育については、中学校再開からまだ一週間しか経ってなく、一週目にすべての学年で保健の授業を行っていたため、私が実習に行った週から体育の授業が行われ始めた。

各指導案については、授業参観から感じたことをまずは自分で指導案に組み込み、作成した。作成したものを事前に確認してもらい、アドバイスをもらった部分については改善して授業実践に臨んだ。研究授業に向けた指導案については、自身で作成したものを指導教諭の先生に確認していただき、その後訂正したものを保健体育科の先生方に確認してもらった。そのうえで訂正箇所を修正し、作成したものを全先生方に向けて配布した。

私は体育、保健、道徳の授業実践を行ったため、それらについて分けてまとめていく。

- ・体育の授業は大規模校のため合同体育だった。中でも、2年生については私自身が指揮をとりながら授業実践をすることがあった。他学年においても、主運動後のクラス分散の時に指揮をとり授業終了までを授業実践することがあった。新型コロナウイルスの影響で体育の授業も様々な工夫をしながらの授業が求められていた。授業参観の期間で工夫された授業展開を学び、実践に移していった。主な実習内容は、新体力テストに関するものであった。

- ・保健の授業は最初の週のみ授業参観で、その後の2週間が授業実践になっていた。また、最後の週の保健の授業が研究授業だった。授業実践、研究授業範囲は「傷害の防止」部分であり、研究授業では生徒に「安全マップ」を作成させ、生徒自身の生活へとフィードバックできるようにした。

- ・道徳の授業は2週間授業を参観させていただき、最後の週に授業実践を行った。「あきらめない気持ちで」という主題の「左手でつかんだ音楽」という題材を用いて授業をした。

C(検証、学生の反応)

- ・体育の授業は実技開始からあまり時間が経っていないこともあり、まだ慣れずに戸惑っている生徒も多くみられた。その中でも言葉かけの方法によって生徒からの反応も異なっていた。

・保健の授業は、「座学でつまらない」とマイナスなイメージを持つ生徒もいるようだった。そのため授業の導入部分でいかに生徒の心を掴むことができるかということがとても大切になるということをお教えいただき、実践した。その結果、生徒からはとても良い反応があり、生徒をうまく座学の授業にも引き込むことができたのではないかと考えている。

・道徳は本当に様々な意見が出てくるが、ただその教材について考えているだけだと飽きてしまうのかなという印象だった。使用した教材から生徒にとってより身近な内容へと落とし込むことができるかということがとても大切になると感じた。

A(改善点)

・体育の授業は時間管理をしっかりと行っただけで、褒める部分と締める部分を使い分けながら授業を展開していくことができるように改善していきたい。

・保健の授業はその授業における一番の重要ポイントはどこにあるのかということを明確にし、ポイントをしっかりと押さえることができるようにしたい。また、授業時間に対する各活動の時間配分にも注意して授業を展開していくことができるようにしていきたい。

・道徳の授業はもっと生徒主体になるよう、授業展開を工夫するとともに、生徒からの意見を拾いながら授業を展開していくことができるよう改善していきたい。

②今後、実習へ行く後輩へのアドバイス

実習に向けて多くの人が緊張をしますが、それは誰でも同じだと思います。その中で、実習期間をどのように過ごしていきたいのかということを自分の中でしっかりイメージしておくことがとても大切になると思います。

私からのアドバイスとしては、コミュニケーションについて伝えます。最初の週はどのように生徒達とコミュニケーションを取ればよいのかと不安に感じ、悩むと思います。しかし、生徒から来てくれることを待っているのではなく、自ら生徒について知ろうとヒントを探すことがとても重要になると思います。その過程において、指導教諭の先生や学年の先生と多くコミュニケーションを取り生徒について理解を深めることや教室内の掲示物から生徒について理解していこうとすることは大切になると思います。それらの小さな情報から積極的にコミュニケーションを取るようにし、会話を広げ、実習期間中のコミュニケーションにつなげていくことができると良いのではないかなと思います。クラスの生徒は全員が同じ性格や特徴を持っているわけではありません。それぞれが色々な面を持ち合わせています。全員に対して「平等」に接していくことはもちろん大切だと思いますが、一人一人と向き合いその生徒に合ったコミュニケーションを取っていくことで少しずつ教師と生徒間の関係を築いていくことができるのではないかなと思います。この関係を強く築くことで、日々の学校生活はもちろん、研究授業に向けても生徒がすごく一生懸命に考え、授業に協力してくれると思います。

たくさんの方に挑戦し、充実した実習期間となるよう頑張ってください。

『幼稚園実習報告書』

石井 美怜（福祉総合学部）

実習先：千葉県私立幼稚園

1. 実習で取り組んだ実習内容

今回の実習では、年少、年中、年長と各年齢のクラスずつに入らせていただき、年中クラスで絵本実習、年長クラスで責任実習を行った。具体的な内容としては、幼稚園の1日の流れに沿って子ども達と一緒に活動し、年齢や発達に応じて朝の支度、着替えの援助を行った。また子ども達の降園後はコロナウイルス感染防止のため玩具などの消毒や清掃を行った。各クラスに入った際には、そのクラスの1日の流れに沿って子ども達と関わり、クラス担任の動き、子どもに対する声掛けなどを学んだ。また、自由遊びなどの時間では、子ども同士の関わりの輪が広がるような声掛けやごっこ遊び、絵本の読み聞かせを行った。責任実習では、敬老の日が近かったため5歳児クラスで紙皿とストロー、花びらの形に切った画用紙を使用して、回すと花が咲く『コマ』の製作活動を行った。

2. 実習の目標と達成状況

実習の目標として、①それぞれのクラス担任が大事にしていることを理解し学ぶ、②子どもの発達の違いや個人差に合わせて、必要以上に援助せず子どもが自分の力でできるように見守るという2つを設定し実習に臨んだ。

1つ目の目標の達成状況として、朝の活動中や先生の話聞く場面などでおしゃべりをしている子、姿勢が崩れている子に対して積極的に声掛けを行った。他のクラスに入った際もそのクラスの先生が大事にしていること（姿勢や一人ひとりを認める等）意識していることを観察実習や質問を通して学び、自分自身もそのことを意識して子ども達と日々関わることができた。

2つ目の目標の達成状況として、子どもが何かに挑戦しているときなど、危険なこと以外先回りして止めずに見守るということを意識して実習を行った。たとえ失敗したとしても、子どもはその経験から学び、次はどうしたら上手くいくのか試行錯誤を繰り返すことで考える力を身に付けていくと学んだ。このことを頭に入れて子ども達が自ら率先して考え行動できるような投げかけを行い関わるることができた。

3. 実習で学んだこと・反省点・今後の課題

今回の実習で学んだことは、年齢によって必要な援助が異なるのはもちろんだが、同じクラス内であっても子どもによって援助方法が変わることである。そして、年齢が上がっていくにつれて今自分は何をするべきなのか自分で考え行動できるようになるために個々よりも全体に向けての声掛けが中心になると学んだ。また、子どもが頑張ったときや何かできたときには声を掛けることで、子ども達は見ていてくれているという嬉しさや安心感を抱くため、子ども一人一人に声を掛け認めることの大切さを学んだ。

反省点としては、実習記録に子どもや保育者の意図についての考察が不足していたことだ。その日の流れや出来事について助言を受けるまでただ記録していたので、あの時の子どもや先生の

行動にはどのような意図があったのかなど自分なりに考察し、一步踏み込んだ内容を最初から書くことでもっと内容の濃い一日を過ごせていたと感じる。そして、責任実習を行い、実際に子ども達を前にしたときに気づける細かい部分への配慮や作業を進めていく流れの改善など様々な反省点があった。その中でも指導計画書の立案通りに進めようとせず目の前にいる子ども達の反応や言葉をしっかりと受け止め、臨機応変に対応し進めていくことが大切であると学んだ。

また、先に終わってしまった子への対応準備が足りていなかったため、子どもが最後まで飽きずに楽しみながら集中して活動が続けられるよう工夫し、全体に見通しを持って進められる声掛けをすることも今後の課題である。

『幼稚園実習報告書』

土田 樹里亜（福祉総合学部）

実習先：千葉県私立幼稚園

1. 実習で取り組んだ実習内容

実習1週目は観察実習でそのクラスの1日の流れなどを学びました。5歳クラスに1日、3歳クラスに2日、4歳クラスに入りました。2週目から実習最終日までは4歳クラスに入り、2週目から朝・昼・帰りの号令、朝の会や帰りの会の歌の伴奏や読み聞かせ、出席確認、手遊びを最終日まで行いました。

また、10月8日の最終日に責任実習を行いました。幼稚園側から実習生の似顔絵を子ども達に描いてもらうことを責任実習として行うよう指示を受けたので、クレヨンや絵の具を使った表現活動を行いました。

2. 実習の目標と達成状況

実習の目標は子ども達一人ひとりにあった言葉掛けをすること、責任実習をスムーズに行うこと、保育者と保護者の関わりを学ぶことでした。

言葉掛けに関してとても良く学ぶことが出来ました。保育者は子ども達一人ひとりを理解し、時間がかかっても子ども達が自分で出来るようになるような優しい言葉掛け、子ども達も頑張ろうと思える言葉掛けをしていました。私も観察を通して子ども達のことを知り言葉掛けを行い自分のことは自分で出来るような言葉掛けをすることが出来るようになりました。

責任実習では指導計画立案と事前準備をしっかり行い時間内に製作を完成する事ができました。

保育者と保護者の関わりの面では、あまり見る事が出来なかったのですが、先生方は連絡帳やお便り帳で子ども達の様子などを書き、保護者に子ども達のことを伝えていました。また、朝、保護者がクラスまで子どもを送ってくる保護者に対して保育者は子どもが最近出来るようになったことなどを報告している姿が見られました。

3. 実習で学んだこと・反省点・今後の課題

視野を広く観察することで子ども達を理解する事ができ、遊びの展開を行ううえで大切だと学びました。

また、一人で二十人をまとめ自分に注意を向けて活動へ促すことの難しさも学びました。

責任実習ではスムーズに製作を行うことはできましたが、子ども達が手に絵の具を沢山つけて遊び始めていたことがあったのでもっと子ども達がどのようなことをするかという予想を立てられれば良かったと感じました。今回の実習で私は何かをするうえでの視野の広さを身につけました。

今後はもっと先を見据えて活動を取り組んでいきたいと感じました。

『幼稚園実習報告書』

青木 颯真（福祉総合学部）

実習先：千葉県私立幼保連携型認定こども園

1. 実習で取り組んだ実習内容

3歳児クラスに5日間、4歳児クラスに5日間、5歳児クラスに10日間入りました。さらに最後の1週間は責任実習に向けて5歳児クラスで保育に参加しました。

実習で取り組んだことは、活動の間や朝の会や帰りの会に手遊びと絵本の読み聞かせをしました。また、園庭やホールに移動をする際に子ども達が並べられるように声掛けをして、移動を促しました。担任実習では、5歳児クラスでストローと紙皿を使ってコマを作成しました。

2. 実習の目標と達成状況

今回の実習の目標は、担任実習での集団と個への関わりを知ること、子ども達一人一人に対しての関わり方の違いや工夫の仕方を学ぶことです。

達成状況は、「担任実習の集団と個への関わりを知る」では、コマの作り方を伝えるときは集団で関わり、子どもが作成を進めているときは個で関わり、また集団での関りをする切り替えやタイミングを意識しながら出来ました。しかし、集団とのかかわりをしている時に個へ意識が向かなくなっていた場面がありました。

「子ども達一人一人に対しての関わり方の違いや工夫の仕方を学ぶ」では、しっかりと子どもたちのことを観察し関わることも大切だが担任の先生と子どものお話をする事で自分では気付かなかった部分があること感じ、子どもとだけではなく先生との関りが必要だと感じました。

3. 実習で学んだこと・反省点・今後の課題

今回の実習を通して、学んだ事は二つあります。まず一つ目は幼稚園教諭としての立ち振る舞いです。ルールをしっかりと伝え、守らない子どもがいたらしっかりと注意をするなど、ただ関わるだけではなく先生としての関わり方を学びました。子どもの前に立つ時は、丁寧な言葉を使い、子どものモデルとなるように振る舞う事が大切であり、子どもと遊びながら関わり活動をする時は、しっかりと進行をしながら子どもと関わる事を学びました。

次に、状況に応じて声や表情を変える事です。子どもに大切な事を伝える時やお話を聞いて欲しい時は、声の大きさや緩急をつけたりと、変化を付けたりする事で子どもの意識を集められると学びました。

反省点は、活動の間などに個人の関りが多くなってしてしまう場面があったことです。全体に気を配ることが出来ずに一人の子どもと関わってしまいました。また、子どもの数が多い組に入った時に自分自身とても混乱してしまうことがありました。

今後の課題は、先生としての子どもとの関わりを意識する事です。子ども一人ひとり関わる事は大切だが先生として活動の流れを止めずに子どもを促し、進行することも大切だと感じたので、今後現場に出た時には、先生としての関りを意識できるようにしていきたいです。

『養護実習目標に基づく学びと課題』

川嶋 桃花（看護学部）

実習先：北海道私立高等学校

自分がどのような役割を担っているか、何をしなければならないかを明確にすることが必要である。当たり前のことではあるが、自分のすることが分かっていないと何も出来ずただ言われたことをするだけになってしまう。今回、避難訓練や報恩講の見学・参加することができ、避難訓練では教員1人1人が自身の役割を把握し自身の行動・誘導に責任をもっているのを感じた。

学校の環境作りの1つとして空気検査など、外部の人に介入してもらうことで安全性や学校環境が保たれ、専門的な視点からの助言・指導により、よい学校作りに繋がることを学んだ。専門職との繋がりは何か困ったことがあった際、相談ができるようなネットワークの1つになると思う。

保健室には様々な理由で来室するため、的確に対応していくことが生徒の精神的不安の軽減につながっていることを学んだ。来室理由は、ケガや体調不良だけでなく悩みを聞いて欲しいやお弁当を食べに来る等である。ケガには処置、体調不良には保健室で休養するか家に帰宅するか、少し休養してから授業に出席するか本人がどうしたいかを確認する。高校になると自分がどうしたいか意思がはっきりしている、又、義務教育ではないため授業の欠席が多いと単位不足となり留年等の問題が生じてくる。そのため、自分で教科担当の先生に聞き単位を確認して、どうするか判断出来るように促すことが大切。これからのことを考え、人に甘えてばかりではなく自分で行う、自立出来るようにサポートしていくことが養護教諭の重要な役割の1つだと思う。そして、様々な生徒がいるため1人1人にしっかり向き合うことで、信頼関係の構築につながり、何度も話すことで本音を言ってくれるような関係性を築くことができる。

その年によって対応しなければならないことが変わってくることがある。今年度は新型コロナウイルス感染症の拡大防止のため感染症対策等が必要不可欠である。休校措置が取られたことで、学校に来ることが出来なくなってしまった生徒（特に1年生）や生活リズムが乱れ学校に来て体調不良等、勉強がわからない・友達ができない等により不安やストレスにつながるといった、このご時世だからこそ出てくる問題がたくさんある。その時に応じた対応を的確に行っていかなければならない。そのためにもチームとして学校全体で協力して対応していくことが必要である。又、養護教員研究会に参加し他の学校の養護教諭と情報交換や共有をすることで、その生徒にとって最善の方法を見つけることに繋がる。

今年度は新型コロナウイルス感染症拡大における「新しい学校生活様式」を周知し実行する必要があった。実際に行っていたこととして、マスク着用（食事以外）、保健室前に体温計の設置、全生徒・全教職員の毎朝の体温チェック表の配布、食事は前を向いて、消毒液の設置（職員室前・購買前・自動販売機前・各教室）、行事の中止・分散（行事は行うが学年毎に分け日程調整）、大きい声を出さない、換気、AED講習や外部から人が来るときは入り口で検温、清掃時電気スイッチやドアの取っ手、椅子の背もたれ（椅子を引いたりするときが一番触る部分）等の消毒を行っていた。その時の時代の変化に上手く対応していかなければならない。対応力がその後の行方を左右する1つだと思う。

今回のグループワーク・発表を通して「本人がどうしたいか」が一番大切なことであると学んだ。こちらが何でも指示してしまうと本当に本人がしたいことではなくなってしまうことや余計に学校などに登校しなくなってしまう可能性がある。本人が一番どうしたいかを傾聴し一緒に考えていく。その際に担任や各教科担当も交えて今後について考えて行くことが重要である。

担任や各教科担任の先生と予め連携を取り、情報交換・共有を行うことが対応の早さに繋がると思う。（教育格差ができないようするためにも）

自分の思っていることは言葉にしないと相手に伝わらないため、生徒に対し積極的にコミュニケーションを取り、声をかける等をして1つ1つ段階を踏んで（学校に来られたことを賞賛する等）改善方向に導いていくことが求められていると思う。声かけや気にかける・学校生活の様子を観察することで、少しの変化にも気づくことができ迅速に対応できることに繋がると実習を通して学んだ。

課題は、校内・外では様々なケガ等が発生するため、それに対応する知識・技術が必要。基本1人で処置等をするため、1つ1つの対応を的確かつ迅速に行うことが重要であり、1つ間違えると回復が遅延したり状態が悪化したりしてしまう可能性がある。そのために、幅広い知識（特に学校で起こりやすい怪我や疾患等について）・正確な技術が必要。

今回、生徒に指導することの難しさを感じた。何でも「いいよ。いいよ」としてしまうと生徒のためにならず、生徒のために言わなければならないことが言えないと悪い方向へ進んでしまうことも考えられる。そのため、関わっている生徒のためになるような助言ができることが教育者として必要なことだと思う。何でも肯定するのではなく、否定や批判をするような強い口調ではなく「これは少し違うんじゃない？」等と寄り添いつつ指摘できるようなスキルを身につける必要がある。

生徒（高校生）・保護者・幅広い年齢層の教職員・外部の方といった10代～60歳代の方たちと関わるためコミュニケーション力がとても問われると思った。コミュニケーションを取るためには、先生方の動きを把握したり授業中の様子観察や必要に応じこまめに連絡を取ったりといった行動を自分から積極的に関わっていくことが大切であるため、指示待ちにならないよう自分から行動するように、今までよりも心がけて行くことが必要。

求められていることに答えることやそれよりも一歩先のことが出来るように視野を広くもつことも必要であると感じた。視野を広くもつことで、必要なこと・準備しておくことが予測でき早め早めの行動をすることが出来る。早めの行動が出来ることにより、物事が迅速に進み、少しの余裕が生まれる。余裕が生まれることによって精神的に安定し人の話に耳を傾けることができる。生徒の話をじっくり聞き対応していくには養護教諭自身の心の余裕も関わってくると思う。このことから、課題など締め切りに追われ焦るのではなく早めに終わらせ心に余裕のある日々を送りたいと思う。

今回3週間の実習で実際に見て・感じたことが沢山あった。今回様々な経験をすることができたため、これを学んで終わりではなく自分にしっかり落とし込み、今後活かしていきたい。

『養護実習目標に基づく学びと課題』

内山 一穂（看護学部）

実習先：千葉県公立小学校

今回の実習で、様々なことを学ぶことができた。その中でも特に学んだことは3つある。

1つ目は、保健室と養護教諭の役割である。児童は一日の多くを教室で担任の先生とクラスメイトと一緒に過ごす。そのため、多くの児童にとっては、クラスという場所が学校生活の大部分を占める。クラスで過ごしていれば、楽しいことや疲れること、悲しいことなど色々なことがある。実習では、様々な訴えをした児童が保健室に来たが、どの児童も保健室に入ると、ほっとした表情をしていたのが印象的だった。それは、担任の先生とは違う養護教諭がいる保健室という場所で、クラスから少し離れたことで児童は安心することができ、クールダウンができるからだと考えた。そのような場所に行き、怪我の処置などをしてもらうのと同時に、心を休憩させ、落ち着けることが、児童たちにとって、またクラスで過ごす後押しやエネルギーになると学んだ。

また、小学生は愛情や安心を求めて、保健室に来る場合も多いということを学んだ。今年は新型コロナウイルスの影響で、私たちを取り巻く様々な環境の変化があったが、児童たちも同様に様々な変化に対応しなければならない1年であった。児童自身は、まず学校が始まる時期が例年よりも遅くなり、新しい学校での生活様式、また学校行事の中止や縮小など、様々な変化を強いられている。また、家庭でも様々な変化があったと考えられる。保護者の仕事関係や経済的な問題など、保護者もストレスを抱え、それが夫婦喧嘩や、最悪の場合虐待につながってしまい、家庭内でも大きなストレスを感じる児童も増えていると考えられる。このように、様々な変化により、児童自身も何となく不安を感じ取り、今年は特に、愛情や安心感を求め、保健室に来る児童も多いと考えられた。児童は、頭痛や腹痛などの症状を訴え来室するケースが多いが、それはこれらのように精神的なものや、不安感からくるものも多く、養護教諭は、その背景を考えることが非常に大切であると学んだ。そして、担任の先生や保護者などの連携を行い、児童が安心して学校生活を送れるようサポートしていくことが重要である。そして、養護教諭は、児童の話を傾聴し、愛情をもった関わり方をすることが非常に大切であると学んだ。

2つ目は、児童の健康には保護者や周囲の環境が大きく影響するということである。例えば、朝ごはんは高学年になれば自分で準備できるかもしれないが、やはり保護者の協力が必要である。また、ひとり親家庭で周囲にサポーしてくれる人がいない家庭は親の負担も大きく、子どももそれを感じ取り、大事なことを相談できず、コミュニケーション不足になってしまうかもしれない。また、歯の治療など、病院治療が必要な場合も保護者の協力が必要不可欠であり、保護者がどれだけ子どもの健康に関心を持っているか、経済的な面、または子育てへの協力体制などで左右されることがある。そのため、保護者へアプローチを行い、理解と協力を得ることが、子どもの健康を守るうえで大切だと学んだ。

3つ目は、連携の大切さである。今回の実習で、養護教諭の仕事は一人でできるものではなく、管理職、担任の先生、栄養教諭、学校医、学校薬剤師、保護者、地域の人々など様々な人の協力や理解が必要となってくる。そのため、コミュニケーション能力や、相手を理解しようとする姿勢がとても大切になると学んだ。

今回の実習では様々なことを学ぶことができたが、それと同時に、自分には知識がまだまだ不足していると感じた。児童たちのサポートをしていくうえで、様々な知識をもっていれば、あらゆるケースを予測でき、必要な連携機関につなぐことができる。そのため、これからの課題として、たくさんの知識を吸収し、様々な経験を積むことが必要であると感じた。そして、変化していく時代に応じ、常に新しいことを学ぶ姿勢を大切にしていきたい。

■中・高教諭課程 保健体育科

目時 修 准教授（経営情報学部総合経営学科）



自己紹介(教職関連の経歴、趣味、モットーなど)

大学を卒業して何気ない気持ちで私立高校に勤め、その後、秋田県公立高校、千葉県公立高校、千葉県特別支援学校に勤め、気づけば大学卒業から合計30年間の教職生活を経験していました。その後、一般財団法人を経て、本学で研究教育をすることになりました。私の取得免許は「高校商業」と「特別支援学校（聴覚障害・肢体不自由）」です。

私は漫然と教師になったのですが、教師を続けているうち、関わっている子どもの成長を実感できたことが教師を長く続けられた理由の一つです。現在は「子どもの成長」を促すクラス運営や授業について、それがどのように生じられ、維持されるのかということに「居心地の良いクラス」という視座をもとに研究しています。この研究の過程で私が大切にしていることは「障害のある子どもに必要な支援は、障害のない子どもにとって便利な支援になる」というインクルーシブ教育の思想です。

担当科目

「教職論」「教育課程論」「教育方法論」「特別のニーズ教育論」「教育実習Ⅰ（事前指導を含む）」「教育実習Ⅱ」「教職実践演習」など

教職を目指す学生へのメッセージ

まだまだ幼い表情や思考をしている子どもたちが卒業間近になると「頼もしい社会の担い手」の表情へと成長します。このような「子どもの成長」に関わることができる教師と一緒に目指しましょう。

■養護教諭課程

太田 幸雄 助教（看護学部看護学科）

自己紹介（教職関連の経歴、趣味、モットーなど）

看護学部の教員としては異色かもしれませんが、看護学そのものよりも看護「教育」に興味関心を持っています。教育学部を卒業後、看護学を学んで臨床でトータル10年位働いてから看護の教員になりました。授業や実習で学生と直接向き合っている時が最も楽しく充実しています。

唯一の趣味は、車に関すること全般です。ドイツ車が自分の趣向に最も合っていると思っています。



担当科目

養護実習、教職実践演習

教職を目指す学生へのメッセージ

「子どもにとって最大の教育環境は教師自身である」

「教育の目的は、子どもの幸福の実現にある」

「大学は、大学に行けなかった人たちのためにこそある」

皆さんの使命は大きく重いです。また、無限の可能性も秘めています。

2020 年度 教職課程スケジュール

1 年次		中高・幼稚園教諭課程		養護教諭課程	
4 月	教職課程オリエンテーション 教職課程登録カード提出		教職課程オリエンテーション 教職課程登録カード提出		
2 年次					
4 月	教職課程オリエンテーション・履修カルテ記入 教職課程費納入		教職課程オリエンテーション・履修カルテ記入 教職課程費納入		
3 月	履修カルテ記入		養護課程学年ガイダンス・履修カルテ記入		
3 年次					
4 月	教職オリエンテーション 内諾ガイダンス・内諾活動開始 介護等体験費納入(7,500 円)	教員採用試験対策講座 1 月 - 3 月	養護実習内諾ガイダンス 内諾活動開始		
5 月	介護等体験ガイダンス 介護等体験事前指導 介護等体験(特別支援学校)				
6 月-2 月	介護等体験(社会福祉施設)		7 月 養護実習成果報告会参加		
10 月-3 月	教育実習ガイダンス				
1 月	教育実習報告会				
2 月	教育実習(幼稚園) 事前面接・模擬保育		養護実習事前面接 模擬健康相談オリエンテーション		
3 月	教育実習事前面接・模擬授業 履修カルテ記入		養護実習事前面接・模擬健康相談 履修カルテ記入		
※介護等体験は中学校教諭一種免許状取得希望者のみ。					
4 年次					
4 月-5 月	教職課程オリエンテーション 教職課程費納入 教育実習生名簿登記 教育実習事前指導	教員採用試験対策講座 4 月-7 月	教職課程オリエンテーション 教職課程費納入 養護実習生名簿登記 養護実習ガイダンス 養護実習事前指導		
5 月-11 月	教育実習		6 月 養護実習 7 月 養護実習事後指導 養護実習成果報告会		
12 月-1 月	教職実践演習 教育実習事後指導 教育実習報告会		11 月-12 月教職実践演習		
10 月	免許状一括申請ガイダンス 1		免許状一括申請ガイダンス 1		
12 月	免許状一括申請ガイダンス 2		免許状一括申請ガイダンス 2		
2 月	免許状一括申請ガイダンス 3 履修カルテ記入		免許状一括申請ガイダンス 3 履修カルテ記入		
3 月	免許状授与(卒業式)		免許状授与(卒業式)		

「教職課程担当教員による報告」投稿要領

1. 日程

- ① 投稿意志確認 9月初旬 各学部教職課程運営委員とりまとめ
- ② 投稿締切 11月中旬
- ③ 査読者決定 投稿を受け付けたものから順次
- ④ 完全原稿入稿 12月1日
- ⑤ 刊行(予定) 年度末

2. 投稿・編集 細目

- ① 投稿有資格者は、原則として教職課程の科目を担当する本学教育職員(専任教員および非常勤講師)とする。ただし、共同発表を希望する場合は、学外の共同研究者を含めることができる。
- ② 投稿は次の区分による。
 - (1) 研究報告: 学校教育や教員養成に関する研究、専門と教科教育の関連における研究など
 - (2) 実践報告: 教授法の実践報告、教職科目としての授業実践報告など
 - (3) 調査報告: 教員養成に関する調査報告、教育界に関する調査報告など
 - (4) その他(資料紹介、教育関係の書評、教育時評等)
- ③ 投稿は、未発表の内容に限る。二重投稿は禁止する。
- ④ 区分(1)～(3)は、その内容と公表の意義について、編集委員会および教職実施委員会(必要に応じて本学の各研究領域の専任教員)の査読と評価を経て、編集委員会が掲載の可否を決定する。
- ⑤ 上記査読者は、査読結果を文書によって編集委員会に報告する。
- ⑥ 原稿の書き方は、下記執筆細目による。
 - (ア) 和文は本文・注を含めて8,000字～16,000字程度、図表・写真等は10点以内を基準とし、欧文は3,000語～6,700語程度とする。
 - (イ) 横組み・縦組みの別も含めて、印刷の様式は編集委員会が決定する。
 - (ウ) 図表・写真の掲載数、掲載サイズ、レイアウトは編集委員会が決定する。
- ① ヒト・動物に対する研究は、倫理上適切に対応されていなければならない。かつ、そのことが投稿の中で明記されていなければならない。図・写真などの著作権処理は、必要に応じて執筆者の責任で行うものとする。
- ② 執筆者用の抜刷はPDFデータでの提供とする。
- ③ 執筆者は、城西国際大学に対し、当該原稿の出版権利用を許諾するものとする。
- ④ 冊子は、原則として電子化し、大学ホームページ上に公開する。ただし、執筆者が電子化公開を希望しない特別の理由を有する場合は、その旨の理由書を提出し、編集委員会の承認をもって、当該論文の電子化公開を拒否することができる。

3. 執筆細目

- ① 原稿1ページ目には、投稿区分、題目、氏名、所属・職位、連絡先・メールアドレスを記入する。
- ② 原稿2ページ目冒頭に題目を記し、投稿区分(1)～(3)の場合は、以下に無記名で、本文、注、参考文献の順に記す。注は後注形式にする。
- ③ 図表・写真には番号やキャプションをつける。
- ④ 投稿の際はプリントアウトした原稿2部を提出する。入稿の際に定稿の電子ファイルとプリントアウト1部を提出すること。印刷上の留意点があれば明記しておくこと。
- ⑤ デジタルデータ入稿の場合は、CD等に各種データをわかりやすく保存して提出する。画像データは印刷に耐える解像度のものを入稿すること。
- ⑥ 著者校正は原則初稿までとする。校正段階での加筆や内容変更は認められない。
- ⑦ 統一をはかるため、編集委員会で体裁を改めることがある。

JIU 教職課程年報 第4号

2021(令和3)年3月31日

発行 城西国際大学 教職課程年報編集委員会
編集 〒283-8555 千葉県東金市求名1番地
TEL 0475-55-8842(教務課(委員会事務局))

